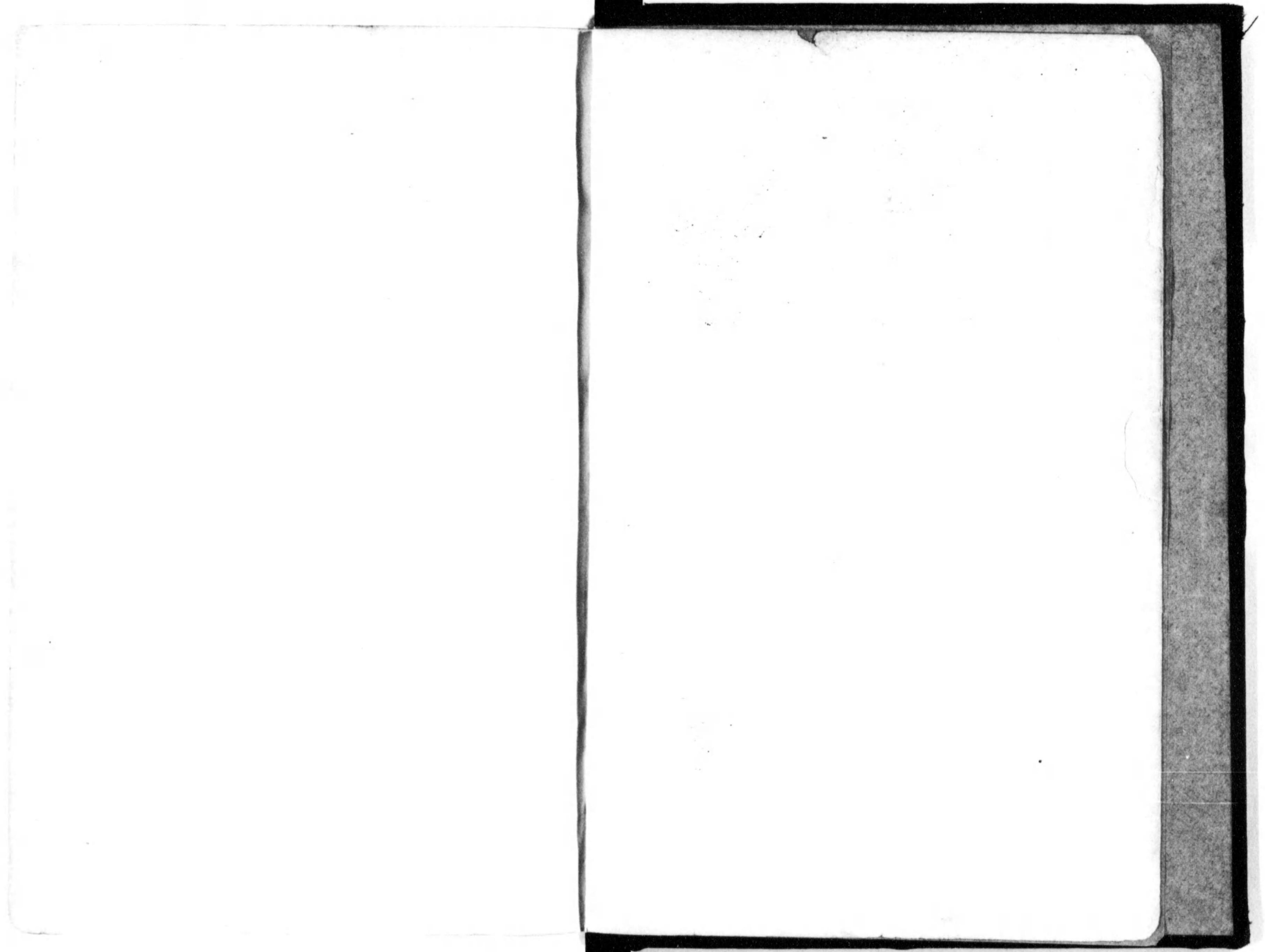


31
353

葉可解入妻可







謝人妻可憐

明治
40 6 8
内交

緒言

(1)

學事隆盛の必然の結果にして、別に異とするに足らずと雖も、然れども恐らく現今の如き、多種多様の議論紛出せる時代はあらざるべし。吾人はあまり多き學說の爲め、却つて目眩み、心轉倒せんとする場合なきにあらず。國學、漢學、洋學、或は神道、佛教、耶穌教、或は科學、或は道學、或は何と各々意見を異にして、論難紛擾を極めつゝあるが故に、これを讀みこれに倣はんとする者をして、其撰擇に苦ましむ。現代の思潮に於て、既に然り。まかのみならず、世界各國、古往今來、苟も人智の少しく開けたるところには、所謂哲學なるもの發生して、各自の意見を自由に表白し、宣傳し、置けるあり、其流派の多き數ふるに違あらず。而して、吾人はまた、學問研究のため、これら諸說をも味はゞざるべからざるが故に、其勞苦や、實

に尠少ならずかくの如く學說に於て、既に多くの疑惑あるに、學生時代は、恰も人生の煩悶期に際するが故、一層多くの痛苦を加へ來る。

煩悶期とは、受動的服従的より、發動的自律的の境界に、到達せんとする場合を云ふなり。この時期は尤も大切の時期にして、善惡賢愚の分るゝところなるが、多くは、宇宙人生を以て不可解なりとし、而も自己の心底には、これにて満足する能はざる疑念あり、煩悶又煩悶、或は病むあり、或は狂するあり、或は墮落するあり、殊に逆境にある人は其苦痛、實に想像するにあまりあり。

かゝる危険の際に當り、これら紛々たる學說議論以外、別に、人生の眞面目あるを覺らしめ、以て彼等に向つて幾分の慰安を爲し、幾分の奮勵を與ふることを得ば、本書の目的は達せられたるなり。

明治四十年三月

著者記す

目次

第一章 宇宙萬有

第一節 無限無窮とは何ぞ……………一

第二節 宇宙に心意あるか……………七

第三節 萬有の無差別……………一三

第四節 何を以てか宇宙萬有を知る……………二〇

第五節 實在とは何ぞ……………二六

第二章 哲學とは何ぞ

第一節 哲學と科學との關係……………三三

第二節 絶對自由とは何ぞ……………三八

第三節 哲學系統……………四四

第四節 哲學の効用……………五〇

第三章 神の有無

第一節 神と云ふ語に就きての種々の見解……………五六

第二節 眞に尊敬すべき價值あるか……………六一

第三節 眞正の神……………六七

第四節 神と吾人との關係……………七三

第五節 眞理と神……………七九

第四章 道德は不自由なるか

第一節 學術と人道……………八五

第二節 人道は自由なり……………一九二

第三節 道德の諸説……………一六七

第四節 道德と自尊心……………〇一四

第五節 自尊と犠牲……………一〇九

第五章 宗教は如何

第一節 宗教の意義……………一一六

第二節 宗教と道德……………一二二

第三節 眞信と迷信……………一二八

第四節 未來世に就て……………一三五

第六章 運命と自由

第一節	運命とは何ぞ	一四二
第二節	自觀と他觀	一四八
第三節	大悟せよ大觀せよ	一五五
第四節	吾人の進路	一六〇
第五節	結	一六五

目次終

萬有可解人事可悟

山崎兼子著

第一章 宇宙萬有

第一節 無限無窮とは何ぞ

宇宙と云ひ、萬有と云ふ、これ吾人を始め、吾人の周圍に瀰蔓せる、大氣、器物、土地、山河、日月、星辰等あらゆる事物、或はそれら事物の存在する空間、及び時間の總稱にして、有形物に限らず、無形界に論なく、すべて無限無窮の境涯を名づけたるものなり。而して、宇宙と云へば、重に、外觀を表し、萬有と云へば、重に、其内容を意味する如く覺ゆ。

宇宙は、例へば、吾人の身體の如く、萬有は諸機關と云ふが如し、諸機關を除きて身體なく、身體を除きて諸機關あることなし、宇宙萬有もまたかくの如く、萬有を除きて宇宙なく、宇宙を措きて萬有あることなし、唯、見かたの異なるによりて、其名を變へたるのみ。

吾人の身體は、大抵五六尺に限られ、壽命は、五十年乃至百年とせらる。たとへ、これが、丈一丈壽命二百年とするも、或は尙ほ長く永くするも、有限有窮たるを免れず、これ吾人のみならず、動物も然り、植物も然り、あらゆる事物皆然らざるはなし、然るに宇宙は、大きに於ても、時間に於ても、無限無窮とせらるゝが故、この點、實に大いに異なるが如しと雖も、よく考ふれば、吾人とても、或は他物とても、決して有限有窮のものにはあらず、何となれば、吾人も他物も、萬有の一にして、宇宙と別なるにあらざればなり。

無限無窮とは、大に於て、限りなきのみならず、其小に於ても、窮りなきことを云ふなり、吾人は如何に思考を運らすとも、有形物を碎き盡して、無形たらしむる能はず、分秒時を幾萬分するも、時間皆無たらしむる能はず、即ち小に於ても、限りなく、窮りなきなり。

されば、森羅萬象は、悉く無限無窮にして、何所にも、有限有窮のものあることなし。

容積、或は繼續時間に於て、無限無窮なるのみならず、又萬有各自の關係を見れば、如何に、奇妙に、無限無窮の聯絡をなしつゝあるかを知るを得べし。

例へばこゝに、一滴の水あり、暫くにして、乾き盡くるが如きも、決して消滅せしにはあらず、水蒸氣となりて、空中に飛散したるまでなり、この水蒸氣多く集りて雲となり、雲また雨雪となりて、再び地上に落ち來る、

而してまた、水蒸氣となりて、前の經歷を繰り返すならん。種を蒔けば、地中より養分を取りて生ひ出で、炭素を取り、光熱に浴して、いよゝゝ茂り、花を開き、實を結び、其實また種となり、草木となり、或は食用に供せらる、食用となりては精力と變じ、種々の運動作業をなし、或は廢物として身外に排泄せらる、この排泄物地となり、肥料となり、又他物となる。轉々、巡廻して、際限なき、大凡かくの如し、而して、この間斷なき巡廻は、これ萬有の、無窮の聯關を説明するものならずや。即ち水の蒸發したるは、空中に吸引せられたるなり、空中に吸引せられたるは、空氣の乾燥したるが故なり、空氣の乾燥したるは、太陽の光熱の然らしむるところなり、而して太陽の光熱はまた宇宙全體の大機關と聯關するものにあらずや。果實に就て考ふるもまた同じ、それ果實の發芽するは、地中より養分を取りたるが故なり、地中の養分は、動植礦等の朽腐しあるが故なり、動植礦は

またそれゝ他との關係ありて、存在したるなり。

斯の如くなれば、一滴の水、一片の花、一個の果實も、それが存在し、變轉するには、悉く、宇宙全體と相關聯せずと云ふことなし。星辰も然り。風雨も然り。晝夜寒暑、天變地妖、皆然らざるものあることなし。

萬有の相關には、吾人々類もまた元より携はり居るなり。先づ食物に就て見よ。食物は穀果肉類等ならずや。穀果は植物なれば、既に言ひたるが如く、種々の變化を通じて、宇宙と關聯すること明かなり。然らば、動物は如何と見るに、こも、唯、植物と一段の階級のみ、何となれば、動物は、植物を食ひて、生成したるものなればなり。而して、人其動物を食ひて、生成すとせば、これまた、動物と一段の差あるのみ。否、動物も同じく動物を食ひ、人間も植物を食ふとすれば、何の異るところかあらん。空氣に就て見るも、またかくの如し、吾人は酸素を吸入して、炭酸瓦斯を吐き出す、植物は

これを分解して、炭素を取り、酸素を放出して吾人に送る、吾人はこれを吸入して、生存することとなる。あゝ、吾人が呼吸し得るは、實に植物の賜なるかな。

飲食呼吸に於ける關聯實にかくの如し。次に吾人は住所を見て、無限の空間に聯接するを知り、事物の變遷を思ひて、無限の時間と相關聯することを覺るべきなり。

かゝる無窮の關聯は、一面より見る時は、これ萬有の、相續不斷なる大活動にあらずや。然り、活動なくして、何ぞ、變轉また關聯することを得ん。而して、活動は、これ、勢力の然らしむるところなれば、勢力は實に、萬有を相關し、窮極なからしむる元力にして、永劫消滅の期なき大怪力と云はざるべからず。

以上の如くなれば、森羅萬象一も獨立自存のものあることなく、各々

協同聯合して始めて成立することを得、而して、無量の變化、無量の轉移を經過すれども、而も不生不滅にして、又永久増減することなく、無始より無終に繼續するものと謂つべきなり。

第二節 宇宙に心意あるか

何人も、吾人々類に心あることを承認すべし。そは、心は直接肉眼にて見ること能はざれども、自己の心は自己自ら顧み、他人の心は其行爲動作によりて知ることを得ればなり。斯るが故に、行爲動作は、心の發現とも、心は行爲動作の源とも、または行爲動作の内觀は、心なりとも云ふことを得て、心と行爲動作と別ものにあらざることを知る。即ち、心なければ、行爲動作あることなく、行爲動作なければ、心なしと云ふも不可なし。かゝることより推して考ふれば、心あるものは人類のみならず、動物は

勿論、苟も、何等かの活動を有するものは、また、何等かの心なき能はず。而して、宇宙萬有は大は天體より、小は一微塵、一小滴に至るまで、暫時も靜止することなく、各々活動しつゝあるものなれば、宇宙は全く心を以て充滿せられたるものと云ふことを得べし。

吾人の活動は高尚にして、他物の活動は劣等なりと雖も、其活動たるに於て、異るところなし。動物は自ら呼吸し、飲食し、生長し且つ運動す、植物も然り、自ら成長し、花を開き、實を結ぶ、これ大なる活動にあらずや。生物のみ然るにあらず、水は常に低きに流れて活動せり、空氣も活動せり、光熱も活動せり、地球も活動せり、日月も活動せり、天體微塵一も活動せざるものあることなし。たゞにかくの如きことのみならず、水は蒸氣となりて汽關車を動かす、炭は火となり、灰となり、或は水素と酸素と合して水となり、磁石は鐵を引き、同種の電氣は相拒反するにあらずや、これ

を活動と云はずして何をか云はん。然り、世界一切の變化轉移は、皆活動の然らしむるところなり。宇宙は實に活動の場所なり。萬有は活動の本體なり。而して、萬有の活動は、萬有を無窮に聯關せしめ、従つて、生氣あり活氣あらしむる所以なりとす。

吾人は既に、活動の内面を以て心意となせり。されば、これらの活動や、たとへ、吾人のものより、極めて單調無味なりとは云へ、其内面の心意の如きものたるに於ては一なり、然り極めて劣等にして、比較するさへ恥かしき程なりとは雖も、慥かに心意に類するものたることは明かなり。而して、萬有の聯關は、活動の然らしむるところにして、活動はこれ、心意に外ならずとすれば、萬有はまた、心意に於ても、無限無窮の聯關を爲すものと云はざるべからず、否活動其ものは直ちにこれ心意なれば、活動の聯關は即ち心意の聯關と云ふべきなり。而して、吾人の心意と雖も、到

底この聯關に洩るゝ能はず、物的關係即ち心的關係にして共に宇宙大機關中のものたるなり。

或は云ふ、吾人は僅か五六尺の身體を有するのみなるに、宇宙は無限の大きさを以て、無窮の時間に涉るものなり、故に其心意も定めて大なるものならん、且つ秩序の整然たる、構造の微妙なる、到底吾人の及ぶところにあらず、されば、吾人は、この廣大なる宇宙の心意に従はざるべからざるなりと。あゝこれ何たる誤謬ぞや、何ぞ自身を卑下するの甚だしきや、吾人は決して、宇宙萬有より小なるものにあらざるなり、何となれば、宇宙を無限大とし、而してこれを合點することを得る我が心は、決して、宇宙より小なるものにあらざればなり。若し小ならば、到底これを玩味する能はず。且つ吾人は外面より見て宇宙萬有と相關聯することは、即ち其内面たる心意に於ける無限無窮の相關なれば、吾人と宇宙とは

大小廣狹を争ふべき筋のものにあらず、そは吾人は宇宙の一部にして、宇宙は吾人の一部なるを以てなり。

斯の如くにして、吾人の心意は決して宇宙のそれより狹隘なるものにあらず、また短小なるものにあらざることを見すべきなり。猶一步を進めて考ふれば、二の緊要なる點を發見するならん。一は其高下にあり。既に言ひたる如く、たとへ、萬有に活動あり、活動即ち心意なりとするも、吾人の心意に比して、如何に多くの隔りあるかは明かなり。即ち萬有は、有機無機の幾階段ありて、其優劣一様ならずと雖も、尤も優なるものすら、吾人の心意と比較する能はざる程の差異あるにあらずや。試みに尤も人類に近しとせらるゝ動物に就て考ふるも、思ひ半ばに過ぎん。其他は數ふるに足らざるなり。第二は利用の力の何れにありやと云ふこととなり。言ふまでもなく、宇宙の活動は無限にして、大は日月星辰の運行

より、小は動植礦の生育變化、或は種々の微菌作用に至るまで、細太洩らさず網羅すれども、これらの作用を研究して、有益無害のものたらしめ、以て吾人の用に供せしむることを得るは、これ偏に吾人の力能によるにあらずや。宇宙は決して吾人を利用すること能はざるに、吾人獨り、彼等を利用することを得るにあらずや。たとへ、今日に於ては、研究の眞最中なれば、未だ到底満足すべき時期に到達せずと雖も、智力ますます、進むに至れば、これを統轄し、制御すること決して不可能の事にあらず。而して、かくの如く力むるは、これ吾人の職責にして、又權能なるを思へば、實に愉快極まる次第ならずや。

要するに、宇宙萬有には心意あらん、而も吾人は決してそれが心意に従ふものにあらず、却つて吾人の心意に服従せしめんとするものなり。

第三節 萬有の無差別

宇宙の根本、萬有の最元は何なりやとの問題は、多く人の論ふところにして、或は物的のものなりと云ひ、或は心的のものなりと云ひ、或はこの二者を超絶したるものなりと云ひ、未だ容易に其何れが正當なりやは、判せられざるが如し。而もこの難問を、極めて容易に説き明す方法こそあれ。それは前に言ひたる活動を以て直ちに心とする説にて、活動あるところには、必ず物質あり、而して活動は、心意に外ならざれば、心即ち物、物即ち心にして、根本よりの差別なしと云ふなり。誠に截然明瞭の云ひ分なるが、この外、猶多くの解釋方法あるなり。

吾人は既に第一節に於て、宇宙萬有の廣大無邊なることより、小は至微至細極まりなきことを知り、同時に其不生不滅なるを知り、而して又、

萬有の相關聯して窮極するところなきを考へ、最後に、物質不滅、勢力恒存の謂れを覺りたり。

かくの如きことを知りて、さて熟々考ふれば、こゝに、萬有の無差別にして、有機無機の區別は勿論、物と心の異なるなき所以を覺ることを得べし。右に述べたる何れに於ても、各々これを説明し得るが故に、重複に渉る恐れあれども、順次列擧すべし。

第一は無限無窮なり

即ち宇宙萬有は、容積に於て、又時間に於て、始めあることなく、終りあることなきなり。大より見ればかくの如きも、其小もまた計りしられざる程にて、物を如何に碎きてまた碎くとも、全く碎き盡すには至るべからず、時間も然り、一秒時の千萬分の一は極めて短かきものならん、而も猶ほ時間あり、これをまた千億分するも、時間を皆無に至らしむること

能はず。大も限りなく、小も限りなし。かくの如き限りなきものを追窮するは愚ならずや。如何に大に、如何に小なりとも、限りあらば、何時かは判然すべき期あらんに、然らざるは、始めより分らぬものと決定したるに同じ。これに向つて、物的或は心的と争ふは無益の業ならずや。

第二は萬有を不生不滅とすることに於て

例へばこゝに、一塊の炭あり、吾人はこの火によりて暖を取り、而して、種々の作業をなすことを得、そもこの炭の暖は何所より來りしか。炭は樹木を焼きたるものなり、樹木は太陽の光熱によりて繁茂したるものなり、されば、炭は、この時既に、太陽より熱を給せられをりて、而して、嚴寒を凌ぐべく、今日これを吾人に傳へたるなり。さてこの太陽は、容易に熱を放散し盡すものにはあらざれども、若し然る場合には、他の物體必ず熱を受け繼ぎて、宇宙の何所にか存在せん。かくの如くなれば、一本の筆、

一杯の水も、其由つて來るところを考へ、次ぎて其將來を想像すれば、外觀は如何に變遷際限なくとも、必ず何らかのものとなりて、存在することは明かなり、而して、この變遷中、ある時は心的となり、ある時は物的となるにて、元より確固不變のものにはあらず。こゝを思へば、誰れか、萬有の無差別を疑ふ如きことをなさん。

第三萬有の聯關を無限無窮とすることに於て

萬有の聯關に於て、尤もよく其無差別なることを知るを得るなり。既に言ひたる如く、萬有の聯關は宇宙の状態にして、これによりて、活氣あり、生氣ある所以のものは、一にこの無限の關聯にあり、活潑々たる宇宙の森羅萬象、一も聯關せずして獨存すること能はず。されば、何れが熱にして、何れが炭なるか、何れが紙にして、何れが布綿なるかを知るべからず、而して又何れが物質にして、何れが勢力なるか、何れが心にて、何れが

行爲なるかを知るべからざるなり。即ち萬有の聯關を言ふは、直接そが無差別を表明すると同様なるに、猶疑議して、最根元は如何との問ひを發するもの多し、實に愚の極と云ふべきなり。

第四物質不滅勢力恒存と云ふことに就て

第二の事實を考ふれば、物は如何に外觀を變ずるも、永劫消滅するものにあらざることを知る。而して、かくの如き變化を來すは、勢力の然らしむるところにして、勢力なければ、何等の運動變化も起るものにあらず。かくして、物質の不滅は、直ちに勢力恒存の言となり、これらの言は、やがて萬有の無差別を表明せんとす。たゞ物質不滅と云へば、外面的、即ち有形物として考へ、勢力恒存と云へば、内面的、即ち無形のものとして、思惟したるものなるのみ。今また例を擧げて見んに、こゝに一杯の牛乳あり、吾人はこれを飲みて精力を得、種々の事業を爲し、一方に於ては、廢物

として身外に排泄す。この場合に、飲みて精力を得たるは、牛乳の心的となりたるなり、身外に排泄したるは、物的となりたるなり。かくの如くにして、心的、物的本來は同一物なることを知るを得べし。

猶手近き例を取りて、吾等の身體に就きて考へ見ん、それ身體には、動脈と静脈とあり、而も動脈遂に静脈となり、静脈遂に動脈となるが故に、何所が判然たる境界なりや知り難し、これを静脈と云ひ、動脈と云ふは、便利の爲めに、あるところを限りて、假りに名づけたる名目たるに過ぎず。萬有皆然り、これを有機物とし、無機物とし、精神とし、物質とするも、元來兩者の境界判然たるものにあらず、有機の極は無機にして、無機の極はまた有機となると云ふ有様なり。こゝに於て知る、宇宙萬有は、無限無窮に相聯關して、一事一物もこの聯關に洩るゝことなく、縦横無盡に搦み合ひたる一大鎖網の如きものなりと、これを區別するは、吾人の見て

尤も目立ちたる點を擧げ、由つて命名して、記憶に便し、説明を容易ならしむるに過ぎざるなり。

萬有相聯關することの、内外同様なるは、前に言ひたるが如くにて明かなり。かほど明かに、分り切つたることを以て、不可思議微妙の意あるが如く言ひ觸らし、以て、靈魂不滅を説明せんとする人あり。即ち吾人の靈魂と、吾人以下のものとを、同一に見たる偽論にして、如何にも衆人を愚弄し迷惑する甚だしき毒説なるが、序なればこゝに一言すべし。

余は既に、萬有の聯關を言ひ、吾等の心身も、これに聯關することを述べ置きたるが、又其死後と雖も、勿論この聯關中にあることは明かなり。一身腐りて跡方なきが如きも、不生不滅の理によりて永存することを得、幾多の空間、幾多の時間を経過するも、一毫消滅することなき

を知るなり。かくの如き状態を内観すれば、また幾多の空間、幾多の時間を通じて、ある時は東洋に、ある時は西洋に、或は月界に、或は日界に、猶離れて星界にも到るべし、或はまた再び故郷に立ち歸るやも知るべからず。かゝる不滅の事實ありとも、そは吾人の靈魂其ものゝ不滅とは云ふべからず。従つて吾人に取りては何等の痛痒をも感せざるなり。されば、かくの如きは、靈魂不滅論としては、滑稽極まるのみならず、人心に不安の念を起さしめ、延て、社會に大害を及ぼすものと云ふべし。吾人はかゝる迷論を一掃し去りて、他の真正なるものを見ざるべからず。

第四節 何を以てか宇宙萬有を知る

余はこれまで、宇宙に就き、萬有に就き、種々論議せしが、凡てに何等の

考察もなく、これを實有のものとして研究し、其果して實有なりや、否や、若し實有ならば、吾人は如何にしてこれを知るか等を説かざりしなり、然るに今や進んで、この問題に入らざるべからず。

今こゝに一本の鉛筆あり、これを取りて字を書せばその色黒し、これこの鉛筆の性質なり。而もこれを黒しと知るは、吾人に目あるが故なり。字あれども、目なければ見えず、何ぞ色の黒白を知らんや。これを以て紙面に書せば、亢々颯々の音あり、この音は何なりや、これまた耳の感じならずや。吾人聾ならば何等の音も聞えず。これを握れば直ちに其硬さを知る。これ手の感じなり。又其先きにて頬を突かば、僅かの痛みを覺ゆ、これ皮膚の感覺ならずや。これを臭げば一種の臭氣あり、これ鼻の感覺ならずや。吾人はこれらの試験によりて、この鉛筆の色、硬、軟、臭等種々の性質を知り得たり。これたゞ、一本の鉛筆に就てなるが、其他のあらゆる事

物も皆かくの如くにして知り得るなり。然り、宇宙の森羅萬象、悉く然らざるものあることなし。

右の事どもは、何人も承認するところなるが、この論法は、移して以て、無形界に應せしめざるべからず。例へば、吾人が、ある人に愛されたりとせんに、愛さるゝは身外に愛する人あるによるは論なけれども、吾人にしてこれを認知することなかりしならんには、愛されたりとの自覺はこれあらず、如何に多くの人に愛され、或は憎まれたりとも、これを認知することなかりしならんには、何等の感も起らざるなり。其他すべての名譽と云ひ、耻辱と云ひ、喜怒哀樂と云ひ、身外にかく感せしむる原因ありて然るは勿論なれども、死人石像に對しては、何等の感應もなきなり。即ち吾人に心ありて、始めて喜び、始めて悲しむものにして、前の感覺を吾人の心にありとせし論者は、又これら無形界を認知するは、吾人の能

力なりと云ふに躊躇せざるべし。

かくの如くして、吾人は吾人自身を知り、周圍の事物を知り、宇宙を知り、又道德と云ひ、人情と云ひ、科學と云ひ、哲學と云ひ、これを知り、これを考ふるは、畢竟吾人自己の心あるが爲めなることを知るなり。若し吾人にこの心なかりしならんには、眼前のものすら、こは紙なり、こは筆なり、と如何にしてか、知ることを得ん。然れば、宇宙萬有は吾人の知覺思考を通じて、始めて宇宙萬有たることを得るものにして、吾人の知覺思考を外にしては何等の意味も有せざるなり。

然るを、若しも吾人の知覺思考を通じて見たる宇宙萬有、即ち日常遭遇する宇宙萬有は偽物にして、真正なる宇宙萬有は、吾人の智覺思考の及ばざるもの、所謂現象の外に、實體なるものありと云はゞ、そは到底吾人の知り得るところにあらざるなり。知識如何に進むも、研究如何に深

きも、決して知ること能はざるなり。原因結果の想見すべきものもなく、吾人の知力を以て、其幾分をも判断することを得ざる、實體なるものは、吾人とは全く無関係のものたるなり。而も、人、かゝる不可思議物ありと假定し、これを實在と云ひ、これを心霊と云ひ、或はこれを神と云ひたりとせば如何、而して、またこれを尊崇し、禮拜したりとせば如何、滑稽もこゝに至つて極まらずや。

若しかくの如きものを、信仰の目的として尊重せよと云はゞ、吾人の知識なるものを、全然妄なりと云ふに同じ。知識はたゞ存在し得る材料の爲めのみものとなりて、即ち吾人は何時までも、動物的狀態に止まり、精神上の發達は到底望み得べきにあらず。而して、吾人が思考し能はざるものを信仰すとせば、信仰なるものは全然無意味なるにあらずや。今より幾千萬年、進歩發達したる時代とても、知識はすべて妄にして、世

はすべて偽ならざるべからず。あゝ吾人は如何んぞかゝる論法に承服するを得ん、かゝる偽妄の世に奮勵するを得ん。余はかゝる無意味のものを信仰せざるのみならず、又其有或は無なることをも、念頭に置かざるなり、否念頭に置く能はざるなり。

かくの如くにして、吾人は妄信せず、妄想せず、一意、吾人の知覺思考を信頼すれども、また現今の知覺思考を以て、完全無缺なりとは思ふ者にあらざるが故、そが發達進歩するに従ひ、世界の狀態大いに變化すべしと想像すれど、如何に幼稚なる現今の思考とても、決して悔るべきものにはあらず、幾多の研究經驗を重ねて、遂には完全の域に達せしめざるべからざるなり。而して、不完全なる知識の、完全なる知識に對する希望は、決して現象對實在の如き、無意味不可能の事にはあらざるなり。

こゝに於てか、宇宙事物、有形無形に論なく、吾人の心的作用あるによ

りて、始めてこれを知り、またこれを評價することを得るものなるを知
るべきなり。

第五節 實在とは何ぞ

所謂實在に就ては、既に前節に述べたるが、猶少し委しく説明すべき
必要あるなり。

先づ普通に、文字通り解釋せば、吾人が見聞し、知覺し能ふところのも
の、即ち物質界の現存することを云ふなり。我あり、人あり、動植礦あり、山
河土石あり、すべてこれ實在すと云ふなり。又物質界の外、吾人の思考し
能ふもの、即ち精神界も現存するなり。喜怒哀樂の情も實在せり、友人の
好意、軍人の剛勇、偉人の熱心、すべて實在ならざるはなし。又希望あり、想
像あり、崇拜の情あり、皆實在せるなり。かゝる見解は、實在てふ語に就て

の普通なるものなり。而も哲學上の語としての實在は、しかく明々白々
のものにあらず、即ちこれらの物質界、或は精神界を以て、實在とは云は
ず、これらをすべて現象と云ひ、而してこの現象の背後にあるものは實
在なりと云ふなり。前節に云ひたるは、またこの意味の實在なり。されば、
哲學上の實在とは、吾人の知覺思考の及ばざるところにして、吾人に取
りては徹頭徹尾分らざるものなり。分るべき筈のものにあらざるなり。
換言すれば、哲學上所謂實在なるものは、吾人と全然無關係のものたる
なり。

哲學上の實在とは、かくの如く、吾人に分るべきものならざれども、吾
人が思惟し想像する對象は、吾人と全然無關係なること、所謂實在の如
きものにはあらざるなり。思惟或は想像の對象は、哲學上の實在にはあ
らず、普通の見解に於ける實在なり、即ち現象てふものなり。試みに哲學

上の實在と、普通の實在とを比較すれば左の如し。

前者は宇宙を、心的或は内面的より見んとしたるものにして、其希望に對する名目なり。

後者は物質界は勿論、精神界のすべて、智識にても、妄想にても、吾人の心的作用悉皆を含みたるものとす。されば、妄想は妄想にして、眞實ならず、智識ならざれども、吾人と無關係のものにはあらず、否直接吾人の心的産物の一たるなり。

前者にては、吾人の知覺思考を現象とし、假象とし、眞實は、其奥底、若しくは裏面にありとし、これを實在なりと云ふが故に、宇宙の物的關係は云ふまでもなく、吾人の思考力のすべてを超越したるものなれば、實在なるものに就て考ふるは無益なり、想像するは愚なり、信仰することも出來ず、欲望することも叶はず、何となれば、考ふること、想像すること、信

仰すること、欲望することはすべて吾人の心的作用にして、而して、實在は、この心的作用によりて、到達し得るものにあらざればなり、即ち心的作用を超越したるものなればなり。

吾人が知覺する物質界の實在するは言はずして明かなり、精神界に就ても、すべての情、すべての智識の實在なることは、これまた明かなり。されどこゝに少しく疑はしきことあり、そは吾人の妄想なるものは、實在せりや、否やとのことなり。余は妄想にても實在せりと云ふ。妄想それ自らは實在すること明かなり、而もまたこの妄想なるものと、哲學上の實在とは相對應するものなりやと思ふ人あるべし、これ誤りなり、たとへ、妄想にても、吾人の心的作用なる以上は、何ぞ所謂實在の如きものならんや。故に余は、哲學者が用ふる實在なる語の穩當ならざるを云ふものなるか、今は暫らくこれを襲用し、これに依つて、説明の便に供したる

までなり。而して、かゝる問題を、一に形而上の問題と云ひ、哲學の本領なりとも云ふ、而も形而上哲學上の問題は、所謂實在の研究にてはあらざるなり。何となれば、形而上の問題にても、吾人の心的作用の一にして、而して實在は、吾人の心的作用と全然無關係のものなればなり。

而も、人あり云ふ、實在は吾人の心的作用を超絶したるものなれども、全然これと無關係なるにはあらず、即ち實在と現象とは、原因結果の關係、若しくは全部と一部との關係、若しくは完全と不完全との關係により、微かにこれを知ることを得ればなり、否信することを得ればなりと。誠にかくの如くんば、たとへ、僅かにても想見せられざるにあらず。然れども、原因結果の關係と云ひ、全部と一部の關係と云ひ、或は完全と不完全との關係と云ふは、これ實在の心的作用を超絶せざるものなりと云ふに等しく、實在の本性を失ふべきなり。

かくの如くなれば、吾人は、實在なるものゝ、幾分をも心中に浮ぶること能はず、若し幾分を浮べ得たりと思はゞ、そは智的なるか、はた妄想なるか、はたまた信念なるかにて、共に吾人の心的作用なり、心的作用を超絶したる實在といふが如きものにはあらざるなり。されば、實在なるものは、吾人は全く無なりと確言して憚からざるものなり。尙例を擧げて見んに、

ある人は云ふ、若し世に、感覺なるものなかりしならんには、宇宙萬有は、如何の状態なるか、到底名狀するに由なし、名狀するに由なければ、宇宙萬有は、必ず何等かの形にて存在せん、この存在、即ち實在なり、されば、この世界は、吾人の心のみなりと云ふ極端の唯心論は、誤謬なるなりと。

右の説の眞ならざるを説明するは、やがて、實在なるものゝ、有ならざ

11.15
S

(32)

ることを證明するものなり、

即ち彼等はまた云ふ、生物皆無感覺皆無なりとも、世界は必ず存在せん、吾人死するも、世界は依然たるにあらずや」と。而も、かく斷言することを得るこの世界は、既に吾人の知覺思考を経たる世界にして、純粹無點の世界にあらざるを如何にせん、何となれば、吾人の知覺思考を経ざる世界と云ふが如きは、到底ある能はざるを以てなり、されば、吾人死するも、感覺性なくも、世界は存在すべしとは、吾人が現在見聞する世界を土臺としての議論なり。而して、この土臺としたる世界は、既に吾人の心的作用を経たる世界にして、然らざる世界と云ふが如きは、決してあり得べき筈なく、従つて、實在なるもの、虚無なることをも知るべきなり。

第二章 哲學とは何ぞ

第一節 哲學と科學との關係

哲學、科學、其名は異なれども、共に、宇宙事物を對象として、これが眞理に到達せんとする知識の謂にして、其觀察し、考想する手段に於ては、相同じ、即ち知覺と、思考の二方を以て、材料を拾集し、これを淘汰して眞理のあるところを究め、普遍の性を追窮するなり。かゝる點に於ては、兩者の間に差別あることなし。眞理を考察し、研究するの手段に於ては、ちかく相同じと雖も、然れども、また其差異なくばあらず、何ぞや、それ科學は宇宙の一部を以て對象とすれど、哲學はそれが全體に涉ればなり。これを例へば、大海に對する水流の如きか、幾多の流れありと雖も、其終りは皆大海に集ることく、宇宙の各方面を幾多に區分したる科學も、遂には、哲

(33)

學に到達して、終結するものなり。故に、哲學は、各科學の終結の集るところにして、従つて、宇宙一切を包容するものなり。

又哲學は、例へば、百味を入るゝ大器の如し。甘味あり、酸味あり、苦味あり、澁味あり、或は藥あり、又毒あり、而して、各々其需用に従つてこれを出す。甘を要する時は、甘を出し、澁を要する時は、澁を出す。かくして、種々に分れたる一味を、科學と云ふ。されば、吾人は思想鍊磨の爲め、或は心靈鍛成の爲めには、哲學を修むる可なれども、これを以て、人生を益せしめんとせば、大いに其撰擇に注意せざるべからず、即ち甘を要する場合に、苦を取り、藥を要する場合に、毒を取るが如きことなきやう、注意せざるべからざるなり。

科學は日常の經驗より、次第に進歩向上して、一學術となりしものにして、始めは其觀念と云ひ、法則と云ひ、實に微々たるものなりしなり。然

れども、哲學が其萌芽を發するには、必ずこれが材料を供給して發達を助成し、遂には科學とは全く異りたる論議をも爲さしめ、以て、哲學てふ新領地を開拓せしむるなり。而して、哲學は大凡左の三通りにて推論するなり、即ち、

一科學的概念を根據としながら、遂には、絶對自由の推論を爲すもの。

二科學的概念を承認せず、絶對に疑議するもの。

三科學的概念を承認するは勿論、思考力のある範圍内に限りて、絶對自由たらしめざるもの、即ち問題は宇宙全體に亘りても、科學的攻究法によりて、確實に事理を究むるもの。

右の如く、哲學の種類によりて、一樣ならざれども、科學との尤も重要な區別は、寧ろ哲學の絶對自由なるにあり。即ち一切の科學は、ある標準あり、この標準に従つて、眞偽を分つものなれども、多くの哲學説には、

かゝる標準あることなし。元來ものゝ眞僞は、標準ありて始めて定まるものなるに、多くの哲學にはかゝる標準なければ、如何なる説を立つるも、眞或は僞と云ふこと能はず。然り眞ありて僞あり、僞ありて眞あり、眞僞は畢竟比較的のものなるに、哲學には何等の比較すべきものあることなければ、其論議はすべて絶對自由なるなり。而して、絶對自由とは、眞僞、正邪、善惡、是非等凡ての區別を超絶したるものなれば、こゝまで達すれば、哲學は、決して事物を解釋する力あるものにあらず、たゞ想像力推理力等、吾人の心的作用の範圍を試むるものたるに止まるなり。何となれば、事物を解釋して、眞とし僞とするには、必ずある標的により、これを比較し、區別して始めて確定するものなればなり。然るに哲學は、善惡、正邪、甘苦、藥毒、相混沌したるものにして、これ以外に、一事一物もなければ、かゝる大渦中に投じたる時は、只自由に東奔西走、俯地仰天、何等の目的

なく、何等の意義なき蠢動を取へてするのみ。即ち宇宙萬有の全體なれば、外に目的ある筈なく、外に意義ある筈なきなり。

されば哲學の本領は、それが絶對自由の論議にありとせば、哲學はもはや、事物を解釋し能はざるもの、たとへ、解釋の辭を並ぶるも、これたゞ、空理空言として終るものと云ふべきなり。

絶對自由は哲學の本領にして、ある標的を立つれば、既に哲學の範圍を脱したるものなれども、前に言つたる如く、哲學は百川を入るゝ大海の如く、宇宙全體を包容したるものなれば、たとへ、其本領は、絶對自由なりと云ふと雖も、諸科學との境界、嚴然犯すべからざるが如きものにはあらず、即ちこれより、各便益に従つて流れを引く、流入し、流出して暫時も止むことなきなり。本來、同一宇宙の水なれども、流るゝ時は川と云ひ、溜る時は海と名づく、科學、哲學、またかくの如し、本來、一の宇宙事物を攻

究するものなれども、各區域を守りて、猥りに合併せざるものを科學とし、諸科學の終局を集めたるものを哲學となす。されば、科學も終局は哲學に相接するものなれば、何れが境界なりや明かならず、否明かならざるのみならず、かくの如き境地に到れば、科學即ち哲學なり、兩者の間に隔てあることなし。

第二節 絶対自由とは何ぞや

吾人が見聞し、思考する世界は、吾人の感覺を土臺として存在し得るものなるが故に、こゝに、萬有は既に、吾人の感覺の制限を受けたるものと云はざるべからず。

この制限ありて、始めて、萬有の現存を確實ならしむることを得るなり。然り、この制限なくしては、萬有は一も存在すること能はず。換言すれ

ば宇宙萬有は、吾人が知覺し、思考するところのものにして、知覺思考を措いて、他に何ものもあらざるなり。あらざればとて、吾人は何等の痛痒をも感ずるものにあらず。

萬有の存在に就て、既にかくの如くなれば、また、それを思考する方法に於ても異なることなし。吾人は即ち、絶対自由に、事物を考察し、思慮することを得れども、これを有益ならしむるには、ある制限、即ち標準を置かざるべからず、この標準を置きて、始めて、價値は定めらるゝなり。

かゝる絶対界は、哲學の本領なれば、其攻究もまた自由なり。即ち哲學は、百味混沌の大器なるが故に、酸あり、甘あり、藥あり、毒ありとも、この大器中にありては、甘は何に用ひんか、毒は如何にせんかと思慮する必要なく、また思慮したりとて、何等の効もなく、百味百臭、たゞ其欲する儘なるのみ、否、この大器中にありては、百味百臭てふ區別さへも、あらざるな

り、然り、この大器中にある間は、大混雜、大亂體にて又到底、各自の特長を發揮するが如きこと、能はず、然も相分れて大器を出づれば、こゝに始めて、各自の用を爲すを得るなり、かくの如き有様なれば、哲學にては、其言説するところ、只、言説するのみにては、殆んど無意味なり、これをして意味あらしめ、又其正邪を究めんには、是非ある目的に向はしめざるべからず、例へば

性惡説をなして曰く、人類は、本來、すべて性惡のものなり、而も、善を好み、惡を惡むは何ぞや、これ人は、己れ惡あるが故に善を欲し、己れ醜なるが故に、美を好むは自然の情なればなりと、見やうによりては、かく言はれざるにあらず、或はその反對に、性善説をなして、人類は、元來、善なるものなり、然るに世に惡人あるは何ぞや、これ人、愚なるが故に、本心の善を現はす能はざるが故なりと、説としては、何れに云ふも自由なり、然れど

もこれをある目的に適用するに當りて、眞偽は分るゝなり、これを宗教、道德、或は倫理説等に用ふる時は如何。

こゝに於て、先づ第一に問ふべきは、元來宗教或は道德は、人類を善ならしめん爲めか、或は惡ならしめん爲めかとの問題なり、あゝこれ何たる問ひぞや、而も余をしてかゝる問ひを餘儀なくせしむる學説或は宗教あるを如何にせん、この問ひに對しては、何人も、善ならしめん爲めなりと答ふるに躊躇せざるべし、然り、善ならしむる外に、目的多々ありと雖も、惡ならしめんとの意、寸毫もなきことは明かなり、こゝに於て、善惡何れかと問はゞ、必ず善と答ふるなり、然り、問題は既に定まれり、さて、この善たる目的に對して、性善、性惡、何れの説可なりやと判別することを得べし。

惡を去つて、善ならしめんとする場合に、人類は、元來性惡のものなり

と云はゞ、惡を爲すは必然にして、善を爲すは僞なり、天性になきこととなす、誰れかこれを屑とするものぞ。これに反し、人は、元來、善なるものなれども、世に惡人あるは、この天性本心を曇らし居るが爲なり、故に、力めてこれを掃ひ去らざるべからず、然らざれば、人たる甲斐なきものなりと。かくして、性善説の眞にして、動かすべからざることを知るべし。凡ての説かくの如し。説其ものとしては、如何に論議するも差支へなけれど、これを人事に應用するに當りて、可否は定めらるゝなり。

古來、性惡説の、尤も人心を腐敗せしめたるは、倫理學上に於てにあらすして、宗教に用ひたるところにあり。かゝる宗教に於ては、人類を貶して、愚なる、惡なるものとし、且つ到底これを改善する力なきものとし、一意、絶對無限の大有力者に依頼せよと教へたり。不道德に陥る怪しむに足らず。

右の性惡説と相助けて、尤も有害なるは、不自由意志論なり。この説にては、吾人は善を爲すも、惡を爲すも、すべて自己の自由に由つて爲すにあらず、吾人をして、これを爲さしむる原因、以前より定まり居りて爲さしむるなり、故に吾人は、何事を爲すも、自己の意志に由つて爲すにあざれば、善惡共に責任なきなりと。即ち吾人の自由意志を否定したるものなれば、この説の如くんば、吾人は、繩付きの罪人の如きものなり、手足、否、心靈の束縛に遇ひたる罪人なり。かくの如くにして、何ぞ奮勵し、努力する勇氣あらんや、而も若し奮勵し、努力する勇氣あらば、そはまた、ある原因の然らしむるところにして、吾人の力にてはあざざるなり。果してかくの如くんば、世は死界なり、人は木偶なり、而して誰れか好んで、進歩向上に志す者あらんや、たゞ劣情劣慾の奴隸となりて、獸類社會と化せんのみ。

以上の如くなれば、ある説の眞、或は偽を見分けんとせば、目的に對して、有効なりや、如何を究めざるべからず。説其ものゝみにては、眞偽可否を判断する價值なきなり。

第三節 哲學系統

哲學系統は非常に多くして、互に相辨駁攻撃すと雖も、先づこれを、二個の見點より分類するを得べし。一は即ち、眞理は果して到達し得べきや、否やの點より見るものにして、或は然りとし、或は然らずとなす、二は即ち、如何にして、眞理は到達し得べきや、との點より見るものにして、或は感官を超絶したる範圍に於て、全く思考によりてのみ到達し得べしとし、或は物的及び心的實在體の内容は、たゞ知覺によりて攝理せらるゝものにして、思考は單に、この材料を精鍊し、整齊し、かくして、遂に、普遍

のものを抽出するに過ぎざるものとなす。前者の見點よりすれば、即ち獨斷論、懷疑論の二系統となり、後者の見點よりすれば、即ち觀念論、實在論の兩系統となる。

第二は、宇宙萬有の實體は、果して何なりやとの問ひより見るものにして、この説に數種あり。多元論、二元論、一元論等なり。又多元論に、分子説、及び元子説あり。分子説とは、存在の根本的分子に數種あることを認むる學説にして、其分子たるや、恰も化學の元素なるものと同様なり、即ちこれを分ちて更に單純のものとなすを得ず、曰く、世界は無數の獨立自存的分子を以て成るものにて、此諸分子は共通の起源を有するものにあらずと。元子説にては云ふ、宇宙の根本は元子なり、元子は精撰を経たる分子にして、物質的と云ふよりは寧ろ精神的のものなりと。されば、これらを多元論と云ふと雖も、兩者共に唯物、唯心の何れかに屬するもの

と云ふべし。

二元論とは、宇宙の存在を以て、一部物質的に、一部精神的の外観あるものとなす、而して物質の本性は延長なり、換言すれば、空間のある部分を占有するものなり、これに反し心の本性は思想なり、空間的廣延性あるものにあらず、この二本質は、根本的に相違せるものにして、一は廣延的、一は思想的なり、而も兩者の關係は、相互的影響の致すところなりと。

一元論に數種あり、先づ唯物論にては、宇宙の根本を物質とし、精神はこれが附屬性なりとするものなり、而してこれが證據としては、凡て吾人の心的作用は、必ず腦組織に何等かの影響を及ぼす事實によりて明かなりと云ふなり、神經なくんば心なし、腦の働きなくして何ぞ思想のあるべけんや、大脳中に何等の變化なくしては心の作用ある能はざるなり、極言すれば人は其食ふところのものなりと、またこの説にては、勢

力恒存なるものを以て、有力なる論據となすものなり、熱となり、蒸氣となり、運轉し、摩擦し、種々の形に變化すれども、すべてを通じて、この勢力は、些の増減をも來すにあらず、而して、其發點に於て物質なるものが、如何にしてか心的となり得ん、若し心的とならば、こゝに勢力恒存説は、破れざるべからざるなりと。

唯心論は之に反し、一切物的のものは、心的のものゝ變化に過ぎず、心的のものより、物質は演出せらるゝなりと、尙論すらく、たとへ、心の外、物質なるものありとするも、心は高尚にして、物は劣等なりされば、物質によりて心を説明するは、不可能なれども、心によりて、物質を説明するは、穩當なり、これ二者の中にありては、心を以て、それが代表者となさざるべからざる所以なりと。

唯心論にも種々の異なるあり、一は、自己の心以外に、宇宙萬有あること

なし、宇宙萬有はこれ、自己一心の所作なりと云ふなり。又は、萬有は究め究むれば、遂には心的状態となる、物質といひ、精神といふは、假りの名にして、實は一大心の發現なるなりと。

或はまた、物質と云ひ、精神と云ふも、實は同一事物の両面なりと。この論を並行論と云ふ、思へらく、物的現象と、心的現象とは、二者互に密接の關係を有するものにて、而も各自完全のものなり、故に一方に起ること、他方に影響するにあらず、即ち二者は原因結果の關係にあらず、二者同時に相並んで發現するなり、この並行は二者の同體なる所以なりと。或はまた、物心兩者を超越したる一元を以て、最根元とするものあり。これを抽象的一元論、或は一神論と云ふ。

又物と云ひ、心と云ふも、實は同一事物の両面に過ぎず、物の自觀は心にして、心の他觀は物なり。事々、物々、心ならぬはなく、物ならぬはなきなりと。これを具象的一元論、或は汎神論と云ふ。

又宇宙の實體は何なりやとの疑問の外、猶他の方面より、哲學系統は種々に分つを得べし。即ち批判的觀念論と云ふが如き其一なり。この哲學にては、吾人が認識作用を云爲する前に、先づ認識其ものゝ力と、それが到達し得る範圍とを考察せざるべからざるものにして、かくの如き方法を批判と云ひ、而してこれを、批判哲學と云ふなり。

この外、樂天論と云ひ、厭世論と云ひ、折衷論と云ふが如き數種あり。各々それ相應の理由を附して、論議しつゝあり。學說としては、何れにても、非なりと云ふべからず、これ哲學の性質、即ち絶對自由なる所以なり。而もこれを真とし、偽とするは、ある標的に對しての場合のみなること、前に言ひたる如く老かり。

第四節 哲學の効用

凡ての學術智識は、其効用二途あり、一は理論上即ち精神上にして、一は實行上なり。哲學もまた然り。而して、哲學の範圍は、宇宙全體に涉りて、絶對自由に論議するものなるが故、やゝもすれば、有害無益の論法を振り廻すことありと雖も、而も大いに思想の鍛鍊を資け、これに徹底する時は、意氣旺盛衝天の勇を起すに至るなり。又諸科學は、直接人事に用を爲せども、哲學は間接なり、間接なるが故に、綽々たる餘裕を得て、自由に考察し、論議し、撰擇し、以て大いに精神上の閑暇は得らるゝなり。先づ知識に關して、哲學の効用を見るべし。

諸科學は、宇宙事物を、各部に區分したる智識なるが、哲學は、これら知識を合同せしめて、全體とし論ずるものなるが故、遙かに相對界を離れ

て、絶對無限の境に入り、尤も自由に、宇宙人生を思考し、大觀することを得るなり。而して、又翻つて、各科の參考に資すること少なからず、即ち個々の科學も、終局は宇宙人生の全體に關係するものなるが故に、勢ひ哲學の範圍に入らざるべからず、而して、そが風潮を察せざるべからざるを以てなり。されば、哲學は、科學をして、確固たる論議をなさしむる根底を作るものと云ふべし。

又哲學は、宇宙人生の一切を攻究して、其奥底を極めんとするものなるが故、尤も神秘的なりとせらるゝ神、運命等の問題にも觸れざるべからず。其他、自然とは如何なるか、天とは何ぞ、未來世は果して存するか、而して、徳と幸福とは相一致するか等の如き、或は時間空間は現存するか、はた有限なるか、無限なるか、世は不規則なるか、又因果律に支配され居るか、自由なるか、必然なるか等の問題の如き、或は有機無機の區別は如

何、生命の最初は如何、又吾人は如何にして生命あり得るか等の如き、其他道徳に就き、國家に就き、政治に就き、美術に就き、所謂宇宙人生一切を包羅して、これに向つて、解決を與へんとするものなり。

かくの如くなれば、哲學は、科學に於てのみならず、一切の理念上に於て、大いに實社會の實行爲に關係するものなり。而も、哲學の尤も顯著なる効は、これら理念上よりは、寧ろ吾人の心膽の鍊磨にありとせざるべからず。而して心膽の鍊磨は直ちに實行に影響するものなれば、この點より見る時は、哲學は實に、人事に大關係ありと云ふことを得べし。そは前にも言ひたる如く、哲學は、事物を絶對自由に攻究するが故、心意遂に相對の知識を離れて、絶對の空漠たる境地に至る、この境地に至れば、區々たる差別に拘泥することなく、自由の行動を取へてせんとするが如き心理状態となり、仰天、俯地、些の自己を束縛し、煩悶せしむるものなき樂境を得るを以てなり。

哲學は、知識の上に於て、又實行の上に於て、多くの効用を現はせども、同時にまた、弊害なきに有らず。要するに、哲學によりて利益を受くるが如きは、比較的難事なりとす。

哲學を攻究して單に、知識の上に適用せんとする時は、懷疑、煩悶、底止するところを知らざるに至ることあり。而も、かゝる境界を経過して、これを實行の上を持ち來し、以て心意の養分となす時は、實に缺くべからざるものとなるなり。かくの如き心理状態を稱して悟と云ふ。この悟に達するには、哲學にのみ限らるべきにあらざれども、苟も少しく事理を究めて、推理攻究をこれ事とし、徒らに盲從することを、屑とせざる者に取りては、單なる信仰にては、到底満足さるべきものにあらす。懷疑、煩悶を重ねて遂に自ら、發明するに至らざれば止まざるなり。

而して、幸にしてかゝる大自覺の境に達せば、心意の鞏固、また前日の比にあらず、宇宙を敵としても、更に怯れざる底の、勇氣は起り來るなり。この光明界と、前の暗黒界とを比較すれば、實に雲泥の差にして、全く別人の如き思ひあらしむ。即ち前には、何を考ふるも、考ふる所以を知らず、何を行ふも、其行ふ所以をしらず、或はこれを自然なりとし、天然なりとし、或は窮して、神なり、佛なりと云ふに至る。而も其神たり、佛たる所以をしらず、茫漠として、東西を辨せざるが如し。かくの如きの極は、遂に自ら悟りて、各々其然る所以を明かにし、我を知り、天を知り、神を知りて、毫も疑議するなきに至る。これ哲學攻究最後の効果と云ふべし。

相對的智識は、既に絶對を預想したるものなり。單に相對のみなる時は、決して確固たる能はず。されば、個々隔離せる科學ありとも、これを統一する哲學なければ、科學として成立すること困難ならざるべからず。

而も哲學は、知識の上より云ふも、はた實行の上より云ふも、其關係間接に過ぎざれば、直接指南し、命令するが如き、緊急なるものにはあらず。これを毛筆に譬ふれば、毛は科學にして、軸は哲學なり、軸なくも、毛あらば、不便ながらも字を書することを得、無論これを、軸に箝め込みたる完全のものにはしかざれども、猶多少の用を爲すことを得るが如し。而も軸のみにては、到底筆の用を爲す能はず。余は世人の、哲學てふ名に威壓せられて、余り過重視するの極、思はぬ齟齬に、落膽するなからんことを、警告して止まざるものなり。

第三章 神の有無

第一節 神と云ふ語に就きての

種々の見解

(56)

吾人は、日常別に深く考ふることもなく、神は尊きものなりと思ひて崇拜す、これ習慣の然らしむるところなれば、何等の深意義ありて然るや否やに氣付かざるなり。されば、これに就きて、實際如何なるかと問はれなば、其答へや、容易に出づべくもあらず、たゞ茫漠として、絶大無限の、權威者なるかの如く思はるゝのみ。而もこの觀念たるや、人によりて大いに異り、又同一人にてても、見る方面によりて相同じからず、従つて、種々雑多の見解あるなり。先づ

吾人が、通常神と云へば、行爲の善惡正邪に對して、賞罰するものなり。

又神は、清淨潔白を喜ぶものなれば、吾人は、心身何れにても、不潔不淨ならば、憚り恐れて、これに接する能はざるが如きものなり。不潔不淨とは、心意身邊の汚埃のみならず、生死も然るなり。而して、神は吾人を賞罰するものなれども、而も賞するよりは、罰することに重きを置くなり。されば吾人は、これを恐れ、これを敬すること、爲せども、これを愛し、これと親しむことを得ざるものとす。かゝる神は、目に見えず、耳に聞えず、手に觸れざれども、而も實存するものと思惟するなり。

或は右の如く、精神上及び外面上の不正不潔に就て、賞罰するは相同じと雖も、生死を不潔とせず、又恐れ敬するよりは、親しみ愛すべきものとする神もあるなり。すべて現世に現存するものにて、時には物質的變化をさへ、爲し得るものなり。

又古來より、聖人君子英雄豪傑を祭りて、神とするあり、即ち偉人は死

すれば、これを神と云ふなり。

其他猶多くの神あるべし。然れども其觀念大同小異なれば、今はこれを省き、次に學理上よりは、如何に解釋するかを究むべし。

汎神觀にては、萬有の内面を以て、神とするが故に、事々物々、大小細太皆神の顯現ならぬはなし、月日星辰は云ふに及ばず有機無機に論なく、一微塵、一小滴に至るまで、所謂宇宙の森羅萬象、悉く神ならぬはなしとす。かゝる見地よりすれば、神は宇宙と別なるにあらず、即ち宇宙の別名の如きものなり。たゞ宇宙と云へば、物心兩者の謂なれども、神と云へば、其心的方面のみを指したるにて、物質を一面より見て、神と云ひたる迄なり。かくの如くなれば、吾人は、神を信せずども、神を離るゝこと能はず、神をしらすとも、猶其中にあるなり。されば吾人も神の一部にして、永久これと共にあるなり。且つ又すべての活動は、神のなすところなるが、こ

れ外より力を與ふるにあらずして、内より動かすなり、神は實に活動の原力なりと。

又一神觀なるものあり、汎神觀とは全く異り、人類を始め、宇宙間の森羅萬象は、悉く一神の所作にして、又永久これを支配する權能を有するものとす。故に何ものも、一神の命令に従ふことを以て、最大要務と爲さざるべからず。汎神觀にては、神は宇宙の異名にして、物質の内面に過ぎざれども、一神觀に於ては、神を宇宙以外のものとし、以て萬有を創造し且つこれを支配するものなりと云ふなり。

或はかく云ふことを得べし、それ宇宙間の事物の存在の可能なるは吾人に心ありてこれを認識するが故なり。而も吾々各自が、自己の心を以て知る宇宙は、各々廣狹ありて同一ならず、或る人には廣く、ある人には狭く、或は又功妙に又粗雜に種々異りたる形象にて映するならん。さ

れば人は、各自の力に依つて見得るものは、宇宙の一部分にして全體ならず。而して其見得たる部分の主たること、即ち神たることは可なり。然り、自己は宇宙のある部分の主たることを得れども、全宇宙の主たる能はず。何となれば、吾人は全宇宙を知悉すること能はざればなり。而も吾人は、全宇宙の存在を可能ならしめん爲めには、これを可能ならしむる一大心の存在を、肯定せざるべからず、これ神ならずや。

又實在即ち神なりと云ふあり。曰く

有形無形に論なく、すべての變化極りなき世界の狀態は、眞實の世界にあらず。假りの世界なり、眞實の世界はあらゆる變化を通じて、これを超越したるそが奥底にあり、これを實在と云ふ。實在は獨一至上者にして何所にも遍在し、而して無始無終不變の心靈なり、これ神にあらずして何ぞ。且つ汎神論の神は、無數に小分されたるが如きものなれども、こ

ゝに云ふ神は唯一不二なり。而して彼は唯物論に流れ易く、これは唯心論に類似するものなり。

又吾人は至善を實現せざるべからず。而も現世の不完全なる、到底これを爲すを得ざれば、現世に於ては能ふ限りを爲し、未來世を待ちて、これを完成せざるべからず。而して吾人は、善即ち徳行を爲すのみならず、同時に幸福をも要求するものなれば、この欲望を満足ならしめん爲めに、神の存在を認めざるべからず。即ち神は、吾人に幸福を授與するものならざるべからずと。

第二節 眞に尊敬すべき價值あるか

かく種々の方面より、神を見ることを得べし。これ即ち神に就ての絶對自由の見解なり。絶對自由とは前に言ひたれば、こゝに再びせざるも

直ちに其如何なるものなるかを知るを得べし。即ちこれらの見解この儘にては、眞にもあらず、偽にもあらざるが故に、先づこれがある標的に照さざるべからず。然らば其標的は何ぞや、吾人の心意行動これなり。然り、吾人の心意行動を標的とせざるものは、殆んど神と云ふに足らず。即ち吾人の心意行動を標的とせば、神は尊敬すべきものとなるなり。かゝれば神は、吾人の心意行動に對する權威者としてのものならざるべからず。若し然らざれば、名は神と云ふと雖も、殆んど何等の意味なきものとなり終るなり。神豈かくの如きものならんや。果して然らば、前節に於ける種々の神は、かゝる意味即ち吾人に對する權威者としてのものなりや否や、若し權威者としてのものにあらずとせば、神たる價值はあらざるなり。然らば其如何なるかを究め見ん。

先づ普通一般に云ふ神は、吾人の行爲に就き賞罰するが故に、處世上

の權威者として見るを得るが如きも、現世に於て物質的關係を變化する力ありとなすが如き妄念あり、生死を厭ふが如きも可なりとは云ふべからず。かゝる迷信ありと雖も、而も吾人の行爲に就て干涉するものとなす點に於て、尊敬すべき價值ありと云ふべし。

次に偉人の死後を神となすことは、吾人を激勵し、奮發せしむるに於て、大いに力あれども、これのみにては、吾人を指揮し、監督し、而して惡を憎んで善を撰ぶことを、衷心より望んで止まざるが如き心理状態たらしむる能はざるなり。

次に汎神論に就て見るに、この說にては、森羅萬象悉く神ならぬはなく、山川、枯木、塵埃皆神なりと云ふが故に、かゝる神は吾人より見て些の尊敬すべき意味なきものなり。故に名は神なりとも、人生に對する權威者にあらざるのみならず、殆んど無神論の如き說なれば、こゝに云ふ神

は神としての意味、毫末もこれあらざるなり。

然らば一神論は如何と見るに、この説にては、吾人を始め、世界の構造すべて一神の方寸に出づるものにして、宇宙の何所にも神力を俟たで存在し得るものなし、而して神は常に萬有を支配し居るものなりと。されば、この一神こそは、吾人に對する權威者の如き觀あれども、仔細に考察する時は幾多の難點あり。そは神は吾人を造り、世界を造り、萬物を造りたるが故に、尊敬せざるべからずと云はゞ、吾人は、或は、造られざる方遙かに幸福なりと云ふ者あるやもしるべからざればなり。されば、かゝる見地よりする神は、到底吾人の權威者として首肯する能はざるなり。認識力上より見たる神は、尊敬すべき意味なく、また吾人に何等の痛痒をも與へず、神としては殆んど無意味なり。

然らば、實在即ち神なりと云ふ説は如何、この説は外面高尚に見ゆれ

どもこれたゞ、言語上高尚なるが如く見ゆるのみにて、吾人に取りて些の尊敬すべき意味あらず、否何等の意味あるものにあらざるなり。そは實在なるものは、目以て、見るべからず、心以て考ふべからず、思慮分別の外に出でたるものなれば、知識如何に進むも、社會如何に發達するも、到底これを解する能はざればなり。而も彼等は云ふ解する能はざるが故に只これを信仰せよと。かくの如くんば、信すると云ふと雖も、正信にはあらず、迷信なり、否迷信にもあらず、迷信するさへ吾人の心力を俟たざれば能はず。されば實在は、吾人の心力を以て窺ふこと能はざるものとするれば、そは全く無なるなり、あらば只其文字のみ、不條理を嫌ふ者は、決してかゝるものゝ存在を容さざるなり。

又吾人に幸福を與ふるのみにて、これを罰するものにあらざる神は無論處世の權威者として見る能はず。

以上の如くなれば、不條理ならず、迷信に陥らずして、真正に尊敬すべき價値ある神は一もこれあらざるなり。根本の意味既にかくの如きものなるに態とこれを誤解し、轉釋して、種々の議論を振り廻す者あるは、片腹痛き次第ならずや。然り、ある人は、神の解に種々あるを好機とし、ある時は、空々漠々たることに用ひ、ある時は、不可解なりとし、或は惡人掩護の器となし、時に應じて都合よき言議をなすなり。汎神論者に於て殊に甚だしとす。かくの如くんば、神は吾人を指導して、善に向はしむるものにあらずして、寧ろ人生を毒するものと云はざるべからず。

眞に神と云ふ以上は、唯一の尊嚴犯すべからざる意味あらざるべからず。即ち吾人をして、善に向つて撓まざらしめん爲めに、力と慰籍とを與へ、惡を厭ふと蛇蝎も管ならざる如くならしめざるべからず。然るに、多くは、神を以て、人を迷路に導く道具となし、大いに世道に害ある言議

を爲す。これを矯正するには、神の觀念を一定して、邪説を振ふ餘地なからしむるにあり。人心の腐敗は多く、宗教の如何にあり、宗教の如何は神の觀念の如何にあり、神の觀念豈輕々に看過すべきものならんや。吾人は進んで眞正の神を見ざるべからず。

第三節 眞正の神

種々の解釋、種々の神の有なることを云ふ、されどかくの如きものにては、如何に實有なりと云ふとも、吾人をして、善を爲さしめん爲めに、力と慰籍とを與へ、惡を厭ふこと蛇蝎もたゞならざる如くならしめ、以て人生に必要缺くべからざるもの、これなくば、暫時も安立を得ざるが如きものにあらず。されば神ありとて邪魔にもあらざれど、無くとも猶多くの、不安不幸を感せざるが如き性質のものなり。否ある時は大いに人

生を毒するが如き性質のものなり。かゝる性質のものを、無理に金箔附けて擔ぎ上げ、以て崇拜を迫るが如き論法は、吾人の承服する能はざるところなり。吾人は元より甚く忘信を厭ふが故に、かくの如き殆んど吾人に對して痛痒なき、即ち殆んど無意味なる、若しくは有害なる神を信仰するを欲せざるなり。否大いに進んでこれを却けんと欲するものなり。然らば吾人には、全然神なしと云ふか、否々真正なる意味に於ての大なる神あるなり。

抑も吾人の社會に於ける状態を見るに、善人必ずしも幸ならず、惡人必ずしも禍ならず、不公平極まること屢々あり、又善にして禍ならざるも、其功績の發揚せられざるあり、惡事も多く隱蔽せらるゝことあり、これらの不平不満なからしめんには、是非共これらの、不平不満を償却し得る大有力者を認めざるべからず、この大有力者は即ち神ならずや。さ

れば神は、吾人の行爲如何により、幸福或は痛苦を與へ、以て現世の缺陷を償ふものならざるべからず、これ真正の神にあらずして何ぞや。

吾人は元より現世に於て、自己の至善と考ふるところを行ふ能はざれども、これ社會の不完全なるが爲めに、已を得ざるなり。而も吾人は、爲し得る限り爲さざるべからざるものなれば、精神に於てはこれを爲したると同一なり。而してこれに對する應報不充分、若しくは皆無なりとせば、この缺陷を補ふところの神あらざるべからざるは理の當然ならずや。されば吾人は死後を俟たず、現世に於て、既に神の賞罰を受けつゝあるなり、これを感じざるものは、殆んど人たる價值なきなり。吾人の理想にして妄ならず、吾人の知識信仰にして偽ならざる限りは、是非共この神あらざるべからざるなり。然らざれば、世は全然妄なり、偽なり、吾人は決して、かくの如く信する能はず、然らず、まことに真理に叶ふも

のならば是非共この神あらざるべからず、この神あるは眞理なり、到底拒む能はざる眞理なり。

かゝれば、神の眞正の意味は、漠然たるものにも、不可解のものにもあらず、極めて明白單純のものなり。曰く、道徳的に吾人を賞罰するものなり、吾人の善行爲を賞するのみならず、悪行爲を罰するものなり、たとへ物質的には直接何等の兆候なしと雖も、精神上には必ず靈驗あらざるべからざるなり。

一見右の如くにして、其實大いに異なる一説あり、そは前節に擧げたるものにて、現世の缺陷を補はん爲めに未來あり、而してまた神ありと云ふは同じけれども、神は吾人を賞するのみにして、罰するものにはあらざるが故、この點大いに相違せり。この説をよく吟味すれば殆んど無意義のものとなるなり、即ち云ふ

「吾人の理想は、到底現世に於て實現さるべきものならねば、これを未來に待たざるべからず、然り、未來は吾人の理想の實現さるべきところなれど、理想なるものは、短日月に完結さるべきものならず、尤も現世に於て、これに接近せしものと、然らざるものとは、僅かの差はあれども、かゝる差は數ふるに足らず、即ち現世に於て爲し、事の如きは、善なりとて悪なりとて、この理想に遠ざかること遙かなるに比すれば、云ふに足らざるなり。これを例へば、コップの水は少なく、土瓶の水は多し、然もこれを大海の水に比すれば、コップと土瓶の水の多少の如きは、論ずるに足らざるが如し、善といひ、悪といふも、かくの如く、これを未來の理想に比すれば、殆んど差等なきなり。而して善なるものも、悪なるものも、共に終局目的、即ち理想實現の境に到達するものなり」と。

かくの如くなれば、現世に於ける善悪には、たゞ僅かの差あるのみに

して、而して未來に於ける幸福も、善人のみ受くるにあらず、悪人も受くるなり、たゞ時間に於て、僅かに善人より遅るゝのみ、されば善惡常に雁行するものと云ふを得べし。かゝる神は殆んど無意味のものならずや。而して、到底現世に於ての吾人の權威者として、認むる能はざるのみならず、實に大なる毒説と化するものならずや。

眞正の神は、決してかゝる有害なるものにあらず。眞實處世上の權威者たらざるべからざるが故に、善にても、惡にても、遲速の差こそあれ、其神惠を受くることに於ては、異なるなしと云ふが如きものにあらず。而して、未來は理想實現の境なりとも、理想なるものは、既に現世に於て、思惟し、欲望しつゝあるものなれば、物的障礙なき未來界に於ては、直ちにそが實現を得べきなり、即ち善惡直ちに其報あるべきなり、何ぞ善惡混沌するが如きことあらんや、現世に於ての善は未來に亘りても善なり、現

世の惡は、未來に亘りてもまた變らざる惡なり。かくありてこそ、神あり未來ある甲斐あるなれ、かゝる神を外にして他に一も眞正なる神あることなし。若しありといはゞ、そは無意義のもの、然らざれば有害のもの、若しくは迷妄のものならざるべからず。

これを要するに、有名無實なる種々雜多の神は、兎もあれ、眞正の神の有なることは、吾人の道理心の拒む能はざるところなり。而して吾人はこれを思ひて、自己の心意を堅固にし、激勵し、喜んでこれを敬し、これを拜し、以て向上發達することを得るものなり。

第四節 神と吾人との關係

世人の多くは、神と吾人との關係を、物的外面的に解釋したり、即ち、神なくば吾人何ぞあらん、彼れ活きずは吾人何ぞ活くるを得ん、吾人は始

終神の内にあり、神と共にあり、精神と云はず、身體と云はず、到底これを脱する能はず、脱すれば宇宙外のものとなる、否宇宙外と云ふところなければ、かくの如きは無論不可能なり。永久これと共にありて、其支配を受くるものなり」と。即ち其支配され、命令さるゝは、これに依つて造られ、これと共にあるが故なり。かくの如き神は、吾等が世に生存し得るが故に尊きものなれば、森羅萬象すべて存在し得るものは、神の恩澤に於て、吾人と少しも差異なきなり。神と吾人との關係、豈かくの如きものならんや。

又精神的に見たるものにて、多く人類を貶し、現世を蔑視したり、即ち彼等は云ふ「宇宙の終局目的は至善なり、而して神は吾人をしてこの目的を達せしむ、然るに終局目的たる至善は、現世に於ては到底實現さるべきものならねば、これを未來永劫に期せざるべからず、されば吾人

は死後も生前に引き續きたる事務を取らざるべからず、またこの未來や現世の生命の如き短かきものにあらずして、吾人が至善に到達するまで繼續すべきなり。かくる至善の境に達せんには、幾多の努力奮勵を要するが故に、これに對する慰安幸福をも求めざるべからず、而してこれを與ふるものは神にあらずして何ぞ」とかくの如くなれば、神は吾人の功勞を嘉賞すと云ふまでにて、惡を罰するものにあらず、又現世を輕視して未來を重んずる點に於て、共に真正なりとは云ふ能はざるなり。神の尊重すべき所以は、生存し得るが故にはあらず、また吾人を慰藉するのみにあらず、吾人を指揮し、監督して、而して向上發展せしめ、以て幸福安穩ならしむるが故なり、而も吾人と神との關係は、壓抑的、命令的にあらずして、敬慕的、自從的なり、即ち吾人は神と共にありても、これに命令され支配さるゝにあらず、自己の自由意志によつて行動し、而し

て神恩に浴するか、或は刑罰を蒙るかもすべて吾人の自由なり。而も人かゝる神の嚴存するを知らば、何ぞ好んで、刑罰を蒙るが如きことを爲さんや。

善にして不幸ならば、それ丈け多く神恵を蒙ることを得るが故に、神を信じ、神を敬し、神を愛し得るものは、實に善人なり、悪人はこれに近づくことを恐るゝを以て、神あるを知らざるなり、否神のなからんことを希ふなり。あゝ吾人は日夕神を敬慕し、稱揚して止まざるかな。

吾人は元より獨立を尊びて、他に依頼することを屑とせざるものなれば、たとへ神なりとて、これに信頼するは卑劣なりと思ふ者あらん。而もこれ大なる誤りなり。そは吾人は神ありと假定して、尊敬するにあらず、又神の賞罰あるが故に働くにはあらず、これを信じ、これを敬するは、吾人の智識信仰を、僞なりとせざる必然の結果にして、到底拒む能はざ

る眞理なればなり。

それ、花を見て美しと感じ、聖人賢人の傳を讀みて敬慕の念を起すは吾人の常なり。神を信じ、神を敬するも、またこの情に異ならざれども、而も決してかゝる單なる感情のみならず、神は善惡正邪の實際の判者として、吾人の行爲を左右する力なるが故に、神對吾人の關係は、感情と云はんよりは、寧ろ知的と云はざるべからず。されば吾人は神を信頼すればとて、決してこれに盲從するにあらず、又決して自己の尊榮を傷け、獨立を害ふものにあらざるなり。否一步を進めてこれを言へば、吾人は寧ろ自己の尊榮を保ち、獨立を全うせんが爲めに、これを愛し、これを敬するなり。換言すれば、吾人々類には自己を向上せしむる力あり、この力あるが故に、理想も生じ、眞理も慕はるゝなり、而してこれ人類たる特長にして、他物と異なる要點なるが、神は即ちこの理想を實現せしむるものに

して、この事たるや、抑も真理の極致なれば、吾人は人類として、はた向上的最上級人として、これを敬せざるべからざるを以てなり。

尙ほ少し委しく説明せんに、それ吾人は何ものよりも真理を尊ぶ。真理は吾人の主義なり、生命なり。吾人は吾人以外の何ものをも尊ばざれども、真理のみは尊ばざるを得ず。若し真理を尊ばざれば、吾人は人類としての価値なく、動植礦等の部類に墮落せん。吾人が人類としての価値あり、光輝あるは、この真理あるが爲めなり。真理を除きては、他は紛々たる附屬物のみ、物質界も然り、精神界も然り、科學、哲學、文學、美術、皆然らざるはなし。この真理の光明あるが故に、如何に競争烈しき世に於ても、心中密かに省みて、人類たる面目を保たんとするにあらずや。即ち吾人の面目を保ち、尊榮を全うせしめんには、是非共真理に従はざるべからず。真理に従ふは、吾人の面目を保つ最大要件なり。而して真理は、神の外に

ある能はざれば、神を信頼することは、即ち真理を信頼することにして、決して吾人の屈辱にあらざるのみならず、實に人類の光榮と云ふべきなり。

第五節 真理と神

真理とは何ぞや。これに就き二の答あり、一は真理は吾人の到底到達し能はざるもの、即ち不可解のものとし、一は到達し得るもの、即ち可解のものとするなり。前者にては、思惟と其對象との一致なりと云ふ。即ち吾人の心的作用と、其對象と一致したる時は、これを真理と云ふなり。例へば善惡正邪、喜怒哀樂の情念を始め森羅萬象の有、或は無、或は如何の狀態なるか等あらゆる事物に就きての吾人の思考と、其對象たるものと、一致する場合を云ふなり。曰く

「宇宙間の事物を殘る限なく知悉せんには、右の如き境界に到達することを得れども、然らざる間は到底眞理に到達し得らるべくもあらず、吾人の善と思ふものは、實は善ならず、惡と思ふものは、實は惡ならず、有なりと思ふものは、實は無なり、無なりと思ふものは、實は有なり、其他すべてかくの如し、而も眞理は慥かにあらざるべからず。たゞ吾人の心的作用の不完全なるが故に、これを窺ふこと能はざるのみなり」と、かくの如くんば、眞理ありと云ふと雖も、吾人は到底これに到達し得べきものにあらず、従つてこれを敬重すること能はざるなり。

第二は、眞理は吾人の到達し得るものとする説にして、これに二の異なるあり、而も共に現世に於て、到達し得と云ふに於ては相同じ例へば、こは紙なり、こは筆なりと思惟せし時に、正しく紙或は筆ならば、この思惟たるや眞理なり、又ある行爲に就きて、こは善なり、こは惡なりと思惟せ

し場合に、善行爲或は惡行爲ならば、其思惟たるや眞理なりと云ふの類なり。即ち吾人の智力によつて、眞理を決定するものなり。而して、たとへ、物質的には、未だ悉く吾人の思惟を實現せしむる能はざることありとも、理論上に於ては、到達し得るものをも眞理と云ふなり。かくの如きは、吾人の思惟と、外的存在との一致を云ふものなれば、これを外在的眞理と云ふも可なり。而して、この眞理は、其數無量にして、吾人の知識の進歩に伴ひ、ますます、多數となる譯なり。この種の眞理は、取りも直さず知識の別名なり。

かくの如く、幾多の知識、即ち眞理に到達することを得たれども、唯一至上の眞理には未だし。然らば吾人は、唯一至上の眞理は、到底見出す能はずとして、斷念すべきか、而してこれにて満足すべきか、ある人は満足するなるべし、然り、満足する人はあるべけれども、唯一至上の眞理は、到

底其存在を隠蔽する能はざるなり。

然らば唯一至上の真理は何ぞや、唯一至上の真理は、單に吾人の思惟と、外的存在との一致のみならずして、人生の最高目的と相應するものならずや。然り而して人生の最高目的は、吾人の生活の圓滿なり、處世上些の痛苦不平なき状態なり。かゝる状態たらしめんには、種々なる外在的真理、即ち知識を必要とすれど、これたゞ目的の手段たるに止まるなり。されば人生の最高目的に合するものは、唯一至上の真理ならざるべからず。既に人生の最高目的は、處世の圓滿にありとすれば、唯一至上の真理は、吾人の意志行爲の善惡に従つて、相當の報を爲すもの、善ならば善の報あり、惡ならば惡の報あるものなることは、云はずして明かなり。原因あらば結果ありとは、萬有に通ずるの真理なるが、この真理の、意志行爲に於けるものは、即ち吾人が、唯一至上の最高真理となすところの

ものなり。この真理を認めて、これを尊重するは、吾人々類の名譽なり。單に、原因あり、結果ありと云ふの真理ならば、宇宙何處にも存在するところなれども、而も道德的に、善惡を區別する真理は、人類の外に有せざるなり。この真理を尊重せざるものは、人類たるの光榮を有せざるものと云ふべきなり。

かくの如くなれば、吾人本來の目的は、處世の圓滿安穩にありて、他はすべて、この目的の爲めに使用せらるゝなり。吾人は平常外在的真理、即ち知識の研究の爲めに營々すれども、これを爲すは、吾人の目的にあらず、これを研究し、發明するは、處世上に益せしめんと欲するが故のみ。されば、これらすべての知識は、本來の目的に達せん爲めの手段なり。然り、かゝる真理は、手段たる位置に止まるものにして、それ以上には到るべくもあらず。而して吾人本來の目的、即ち處世の圓滿は、真理以上の真理

ならざるべからず。この眞理は、これ道德的に、吾人に應報するところのものにあらずして何ぞや。然り道德的に應報するものは、他の紛々たる眞理を手段として、吾人の眞面目を成就せしむる最高眞理にあらずして何ぞや。この最高眞理は、即ち神ならざるべからざるなり。

されば、吾人が神を敬し、神を信ずるは、吾人自己を尊重して、人類たる面目を保ち、以て世を偽ならず、妄ならずとなす必然の結果にして、これに依つて、自己の幸福を得んとし、若しくは賞せられんとして、まかすものにはあらずるなり。されども、吾人善なるが故に、神はこれを賞し、吾人惡なるが故に、神はこれを罰するなり。何となれば、神は最高眞理なればなり。

第四章 道德は不自由なるか

第一節 學術と人道

諸科學術は、事物の研究にして、人道は、人の將に、行はざるべからざるの道なり。彼は宇宙の森羅萬象を觀察し、攻究し、以て人生を益せんとするものなれども、然れども、人は是非、これらの法則に従はざるべからざるものなりと、云ふにはあらず、萬物其儘を、其儘として研究し、而してこれを利用して、吾人の便に供するものなり。人道は之に異り、人は必ずかくの如く、行動せざるべからずと、命令するものなり。

天文學は、天體の運行、氣象の變化等を攻究し、地質學は、地味風候を觀察し、生理學は、生活状態を、心理學は、精神作用を、すべてそれ〴〵、專任するところあり。而して又歴史學ありて、人類の變遷興亡の跡を尋ね、往事

を知つて、將來の如何を考へ、政治學ありて、共同生活の方法を究め、倫理學ありて、行爲の善惡正邪を判じ、論理學ありて、推理作用の正誤を分つ等、種々の區別あり、百科の學となりて、各其對象を異にし、以て互に自己の領地を保てり。

然らば人道は如何。諸科學術に於ては、萬有は悉かゞの、理法によるものなりとの事實、確定したりとて、吾人もこの理法に、従はざるべからずと云ふにはあらず、これ吾人の由るべき理法にあらざればなり。然るに人道は吾人の道なり、吾人の將に由るべきの道なるが故に、其云ふところに反すれば、殆んど人たる價值なきなり。

例へば、心理學にては、人の意志は欲望の多き方に向つて働くと云ふ、これ眞なり。而も吾人は、必ずしも、欲望の多き方に、働かざるべからざる理由なし。實際吾人の行動は、欲望の多き方に向ふものなるが故に、心理

學はかくの如く云ふまでにて、心理學にて教ふるが故に、吾人はこれに従ふものにあらず。次に、尤も人道に接近せる、倫理學に就て見るもまた相同じ、吾人は何を以て、行爲の標準となすべきやと問はゞ、自己全體の満足をしてせよ、自己全體に満足を與ふるものは善なればなりと。この善を以て個人的善なりとの意ならば、これ眞なり。而もこれまた、吾人日常の經驗より得たる言にして、倫理學よりして、始めて傳授されしにあらざるなり。そは、吾人は、善行爲を爲したる時は、些の不安なく、尤も満足なる状態にあること常なれば、倫理學にては、これを言ひ直して、自己に満足を與ふるものは善なりと云ふに過ぎず。故に倫理學が、しか云ふが故に、吾人もこれに倣はざるべからざるにあらずして、吾人の經驗より、倫理學なるものを、構成したることを知るを得べし。若し倫理學が、しか云ふが故に、これに従はざるべからずと云はゞ、吾人は、自己の満足を得

んが爲めに、行動することとなりて、全然利己的行爲と化するにあらずや。心理學、倫理學にしてかくの如きものなれば、他は皆推して知るべきなり。

又世に、進化論的道德法とも云ふべきものあり。生物進化の理を説いて、吾人をもこれに依つて律せんとするものなり。曰く「生物はすべて、自然の法則に従つて、進化發達するものなり。自然の力を措いて、他に彼等を、向上せしむるものなし。吾人も、またこの理法に洩れず。この法に従ふ者は、適者として榮え、従はざるものは、不適者として衰ふ。されば吾人は、心意行動すべて自然に従はざるべからず。而して自然法は、競争を以て體とするが故に、他を凌ぎて、自己を發展せしめざるべからず。かくる自然法は、即ち吾人の道德律なるなり」と。元より吾人も、宇宙の一部なれば、内外共に、他と關係しつゝあるは、争ふべからざる事實なれども、これあ

るが爲めに、宇宙自然に従はざるべからずと云はゞ、人類としての價値何所にありや。吾人をして、全然動植礦と同等に下落せしむるものにあらずや。かくの如き宇宙法を以て、吾人の道德なりと云ふは、實に、本末轉倒の沙汰ならずや。吾人の榮ゆるは、宇宙法に従ふが故にあらずして、道德に叶ふが故なり。吾人特有の道德に叶ふが故に、吾人は榮え、又萬物の靈長たることを得るなり。進化論は一科の學なり、學なるが故に、研究し説明して、以て吾人の參考に供することは可なれども、これを以て、直ちに、行爲を指導するが如きは、能はず、さればこの説より出でたるものを、以て、人道となすが如きは、根本的誤謬なるなり。

かくの如くなれば、すべて學なるものは、これを研究して吾人の用に供するまでにて、これを以て、行爲の標準と爲すが如きは、到底能はざるなり。行爲の標準は、人道の外にこれあらず。人道は形式的、規則的のもの

にあらずして、而も必ずこれに由らざるべからずと、吾人自身に下す命令なり。而して、學術と人道との第二の差異は、前者の必然にして、後者の自由なるにあり。

例へば天文學は、天體の運行如何を其儘に見、氣象の變化する原因理由を其儘に觀察するなり。夜を晝ならしむるにあらず、雨天を晴天ならしむるにあらず、たとへ、ある場合に於ては、これを爲すが如きも、根本よりの變化にあらず。地質學に於ても然り、地味風候を考へて、利益を計ることを得れども、これまた僅かに、皮相の變化のみ。性理學、心理學、皆然り、其狀、其性を調べて、便益ならしむることを得れども、全然これを、根本より變改すること能はず。中にて尤も自由なるが如きを、政治學及び倫理學とすれど、これらの學に於ては、共同生活は如何にせざるべからざるか、又如何行動せば、善なるか、惡なるかを究むるものにして、前者は吾人

の性情其儘より見て法を立て、後者も吾人の天性を標準として論ずるものなり。これ同じく、吾人の心理を土臺として、即ち必然動かすべからざるものとして論ずるなり。

吾人が云ふ人道なるものは、かくの如きものにはあらず。これら諸科學以外に超然として、獨り其領地を有す、其領地は自由の境涯ならざるべからず。吾人はこの境涯を有するが故に、他の何ものを有せざるも、人たるの面目を保つことを得るなり。然らず、この境涯を有せず、必然の理法に従ふこと萬物のごどくなれば、何ぞ、吾人は、そが靈長たることを得んや。然り、吾人の人類たるを得るは、この心意の自由あるが故なり。この心意の自由なくんば、人は殆んど死物なり。然らざるまでも、動植礦と比して、何等の相違ありや。吾人には、諸科學の具備するありて、大いに體裁を整ひ、光輝を發し、又大いに實利實益を享受すれども、これたゞ外面の

裝飾たるに過ぎず、吾人の眞面目は、これら外面の裝飾にあらずして、其内心の自由にあるなり。

第二節 人道は自由なり

人類相集りて、共同の生活を營まんとせば、自己一人の都合のみ計ること能はず、必ずある程度まで、自己を制限せざるべからず。然り、自他の衝突を防ぎて、平和幸福ならしめんには、吾人は共通の標準に従はざるべからず、この標準これを道德とも、人道とも云ふ。されば道德は、共同生活に、必要缺くべからざるものにして、これを缺かば、社會は一日も安穩なる能はず、かくの如くして、道德は人類共同の平和幸福を保たしむるものなるが故に、これ、各個人に對する命令の如し、この命令たるや、自己一人の自由を得ざるが故に、道德は不自由なるが如しと雖も、其、これに

従ふは、吾人の自由意思を以てするものなれば、自由ならずと云ふこと能はず。

或は云はん、道德は人類相互間のものなれば、たとへ、吾人の自由意思を以てすればとて、自己を制限せざるべからざるが故に、自由なりと云ふこと能はず。而もこれ、吾人の修養未だ足らざるが故にして、若し、完全圓滿の境に到らば、自己の欲するところ、行ふところ、期せずして、道德に叶ひ、少しの不便をも感ぜざるに至るなり、かくの如き境涯となりて、始めて眞の自由を得たるなりと、然り、かくの如きは、即ち絶對の自由なり。されど吾人は、自己一人の爲めには、かくる境涯に到達するを便なりとすれど、社會より見ては、何等の別もこれあらず、否、差別あらざるのみならず、かくる無意識にて爲さるゝが如きものは、其性質上、何等の價值もあらざるなり、何となれば吾人の眞正の價值は、自覺し、奮勵することに

裝飾たるに過ぎず、吾人の眞面目は、これら外面の裝飾にあらずして、其内心の自由にあるなり。

第二節 人道は自由なり

人類相集りて、共同の生活を營まんとせば、自己一人の都合のみ計ること能はず、必ずある程度まで、自己を制限せざるべからず。然り、自他の衝突を防ぎて、平和幸福ならしめんには、吾人は共通の標準に従はざるべからず、この標準これを道德とも、人道とも云ふ。されば道德は、共同生活に、必要缺くべからざるものにして、これを缺かば、社會は一日も安穩なる能はず。かくの如くして、道德は人類共同の平和幸福を保たしむるものなるが故に、これ、各個人に對する命令の如し、この命令たるや、自己一人の自由を得ざるが故に、道德は不自由なるが如しと雖も、其、これに

従ふは、吾人の自由意思を以てするものなれば、自由ならずと云ふこと能はず。

或は云はん、道德は人類相互間のものなれば、たとへ、吾人の自由意思を以てすればとて、自己を制限せざるべからざるが故に、自由なりと云ふこと能はず。而もこれ、吾人の修養未だ足らざるが故にして、若し、完全圓滿の境に到らば、自己の欲するところ、行ふところ、期せずして、道德に叶ひ、少しの不便をも感ぜざるに至るなり、かくの如き境涯となりて、始めて眞の自由を得たるなりと、然り、かくの如きは、即ち絶對の自由なり。されど吾人は、自己一人の爲めには、かくの境涯に到達するを便なりとすれど、社會より見ては、何等の別もこれあらず、否、差別あらざるのみならず、かくの無意識にて爲さるゝが如きものは、其性質上、何等の價值もあらざるなり、何となれば吾人の眞正の價值は、自覺し、奮勵することに

よりて、始めて得らるべきものなればなり。

哲學も自由なり、道德も自由なり、然も哲學の自由は、理論に於ける自由にして、道德の自由は、行爲に就ての意志の自由なり。哲學の自由は、外事外物に對しての、考想に過ぎざれども、道德の自由は、直ちに實行に關するものなり。哲學も自由なり、道德も自由なり、同じく自由なりと云ふと雖も、前者の自由と、後者の自由とは、また大いに異るところなくばあらず、何ぞや、余はこれを

一、對象の相違

二、理論と實行との相違に歸せんとす、故に次の如きものとなる

第一、哲學は、宇宙萬有を對象として、これを考察し、推理するものにして、これを爲すには、絶對自由なり。道德は、人類を對象とし、これが共同生活に處する、意志の自由なり。

第二、哲學は、理論上、信念上の自由はあれども、これらのものは、些の命令の意味なし。道德の自由は、直ちに命令となりて、實行に現はるゝものなり。

右の如くなれば、哲學は範圍廣く、道德は狭し、狭けれども、自由なる以上は、道德は、哲學に對して、從者の位置にあるものにあらず、否、從者の地位にあるものにあらず、のみならず、却つて哲學の主たるなり、何となれば、吾人本來の目的は、處世の圓滿にありて、而して哲學或は科學を研究するは、この本來の目的を、助成せん爲めなればなり。

大觀すれば、吾人の胸中には、哲學、道德の二大要件あり、而して、哲學は他觀にして、道德は自觀なり、他觀は必然にして、自觀は自由なり。如何に廣大なる哲學にして、如何に精緻なる科學にして、如何に熱心に、事物の奥底を考察すればとて、只事物其のものを、其儘に論議し、考想するまで

にて、即ち他觀し、傍觀するまでにて、道德の如く、これを實行せしめざれば、止まざるが如き性質のものにあらず。然るに道德は、吾人直接の行動に係はるものなれば、他觀せんと欲して、他觀する能はず、傍觀せんと欲して、傍觀する能はず。而して、哲學を始め、諸科學術は、萬有に對しては、必然の關係なれども、吾人の行動に關しては、然らず。道德は之に反し、他物に對しては、直接の關係あるものに非ざれども、吾人に對しては、徹頭徹尾、離るべからざるなり。

哲學は、宇宙の森羅萬象、殘る限なく討究し、攻察す。而して、これを爲すや、絶對自由にて、些の標的あることなし。かく些の標的なき絶對自由の推論は、殆んど意味なきものなることは、既に言ひたるが如し。然り、其推論の眞偽は、これをある標的に照らしてのみ、明瞭なることを知りたる如く、道德も、吾人の自由意思を以てするものなれば、これまた絶對自由

なりと云ふと雖も、これをして、眞に價值あるものたらしめんには、またある標的なるべからず。この標的は、これ、人類相互間の關係たらざるべからず。然り、人類相互間の關係は、道德の標的にして、この標的を立つるは、即ち吾人が無意識ならざる所以を示し、以て自己が、道德を行ふものなることを、自覺せしむる證據たるべきなり。自覺なくして、自然に叶ふものゝ如きは、何等の價值もこれあらざればなり。

第三節 道德の諸説

人は善を爲さざるべからずとは、何人も云ふところにして、誠に明白々々、些の疑ひを容るべき餘地なし。これ甚だ明白なる事柄なれども、然れども、この善とは、畢竟如何なるものかと問はゞ、これに答ふる、蓋し容易にあらざるなり。そは、善の如何なるかを究めんには、人生の目的如何

を考へざるべからず、而してこれに叶ふ行ひは、善なりと云ふことを得れども、人生の目的如何を究明するは、至難の業たればなり。これに就きては、古來幾多の論争ありて、或は幸福なりと云ひ、或は然らずとし、或は向上進歩するにありと云ひ、各々自己の説を以て真なりとして、他を排斥しつゝあり。今尤も著名なるものを擧ぐれば、直覺説、權力説、幸福説、自己實現説、進化論的道德説、勉勵主義等なりとす。

直覺説とは、耳目ありて音色を知り、鼻口ありて臭味を知る如く、吾人には良心なるものありて、善惡正邪を判別することを得、良心は生來、吾人に備はり居るものにして、教育或は經驗等より來るものにあらず、たとへ、教育或は經驗によりて、多少の進歩發達こそすれ、苟も人類たる以上は、良心皆無の者はあらざるなり。されば、人は、良心の命令によりて行爲せば、これ實に善行爲にして、又人生の目的に叶ふなり。故に、學の有無

に係はらず、何人も自知することを得る、この良心を以て、行爲の標準となさざるべからざるなりと。

權力説とは、すべて長上の命令を以て、其標準とするものなり。吾人は、少しも疑議するところなく、父母教師、君主爲政者等の命令に服従すれば、善なりと云ふなり。この説は、一方より見る時は、服従説とも云ふべきものなり。

幸福説に、自己幸福説と、一般幸福説との二あり。自己幸福説とは、吾人畢生の目的は、幸福にあり、徳を修め、善を爲すも、結局は、自己の幸福ならんことを思へばなり。吾人は自己の幸福を措きて、他に目的あることなし、この目的に叶ふ行ひは、善なりと云ふなり。

一般幸福説とは、人は自己の幸福のみを望むべからず、宜しく人類一般の幸福を目的とせざるべからず、而して及ぶ丈け多數の人の幸福を

得ば、吾人の目的は達せられたるなりと。
 自己實現説とは、自己が顧みて、以て、充分なりと思ふ行爲は善なり、自己全體が満足して、以て、更に遺憾なしとする状態ならば、可なりと云ふなり。されば名は異りと雖も、直覺説と同じき説なり、實は直覺説を他觀したるものなるのみ。

進化論的道德説とは、生物の自然に發達進化する事實を調べ、生存競争、適者存盛等の法則を以て、吾人の行爲を律せんとするものなり。換言すれば、宇宙の自然律は、吾人の法るべき道德なりと云ふなり。

勉勵主義とは、宇宙の自然律に従つて、競争し、努力するにあらず、吾人の自由意志を以て、人道を行ひ、而して人類の終局目的に到達せんとするものなり。されば吾人はこの目的に達せん爲めには、吾人相互の關係のみならず、宇宙のあらゆる事物を攻究せざるべからず。即ちこの主義

に於ては、道德は知識の相伴ひたるものならざるべからず。かくして怠りなき状態を善と云ふなり。

これによりて見れば、直覺説、自己實現説は、原因に重きを置き、幸福説は、結果に重きをおく説なり。而して權力説は、長上の命令にこれ従ふものなれば、吾人は、善惡共に、責任を負ふべきものにあらず、法則そのものの如何を論ずるには、可なれども、吾人に些の責任なきものは、道德説としては、取るに足らず。

扱て直覺説は如何と見るに、こは良心の命令に従つて行爲するものなれば、善惡の標準として、如何にも明瞭なるが如きも、而も良心なるものは、固定せるにあらずして、歩々、發達進歩し、若しくは、退歩すらなすものなれば、人により時により、大なる差異なくばあらず、而して差異あるものは、以て標準となすに足らず。但し良心は、善惡の標準となすに足ら

ざれども、吾人の行爲を他觀して云ふ場合には、直覺說、自己實現說、共に眞なりと云ふべし。こゝに眞なりと云ふは、良心にだに從へば善なり、自己全體に満足を與ふれば可なりと云ふにはあらず、吾人が眞に善を爲したる場合には、良心は満足し、而してかゝる状態は、即ち自己の實現なりと云ふまでなり。

人生の目的は、幸福なりとは、何人も拒む能はざるところなるべし、何となれば、吾人の目的不幸にありと思ふ者なければなり。これ甚だ明白なる事柄なれども、現世の有様を見ては、この目的は直ちに實現さるべくも覺えず。さればかくの如きは、たゞ吾人の理想にして、それを實現するには、幾多の奮勵努力を經過せざるべからず。故に幸福說は、理想としては、間然するところなけれども、現社會の道德說としては、餘りに永遠の感なき能はず。こゝに於て、終局は無論幸福圓滿ならざるべからざれど

も、現實現世に於ては、この目的に達する順路として、是非共、力め、勵むべきものならざるべからず、而して遂に、定全圓滿なる社會となさざるべからず、有形無形共に完全とならば、幸福は残る隈なく行き渡らん。かくれば、吾人は、吾人相互の關係に注意するのみならず、諸科學術の研究を始め、あらゆる知識の獲得を爲さざるべからざるが故に、勉勵主義こそ尤も當を得たる說と思ふものなり。

かくの如くなれば、人生の終局目的は、慥かに幸福にあり。この幸福や、自己一人の幸福なるのみならず、人類一般の幸福なり。而して、善とは、この目的に向つて、奮勵することにして、惡とは、この目的に反することを云ふなり。而もこの奮勵や、かの進化論的道德說に云ふ、生存競争の謂にあらず、人類一般の幸福に向つての奮勵なれば、其極は、必然、自己を犠牲に供するものならざるべからず、これ未だ、完全ならざる社會、即ち勉勵

主義を必要とする時代の已むを得ざるところなり。然れば、人あり、最高徳は何ぞと問はゞ、余はたゞ、犠牲と答へんのみ。

第四節 道德と自尊心

宇宙間の森羅萬象、皆同一の自然力の中において、同一の境遇に立ち、夏は暑く、冬は寒く、雨雪に遇ひ、暴風に侵され、天變地妖、皆一統に蒙らざるを得ず。されば、吾人も、元より同一の境遇にあるが故に、冬の暑きを望みて得ず、夏の寒きを願ひて能はず。又吾人航海中にあらばとて、天はこれを憫みて、暴風を起さしめざるにあらず、あらゆる事物を平等に見て、些の等差を附せざるなり。他觀すれば、萬有の常に、平等の位置を取りつゝあり、宇宙は實に公平なり。然り、宇宙は實に公平にして、決して人類をのみ庇護するものにあらず、自然は決して人類にのみ、好都合なるもの

にあらず、はたまた特に、人類をのみ、尊重するものにあらざるなり。然るに吾人は揚言して、萬物の靈長なりと云ふ。これ何故なるか。宇宙はこれを云はず、自然またこれを示さざるに、吾人獨り、自己を目して、萬物の靈長なりと云ふ。あゝこれ吾人の自尊心よりするにあらずや、吾人は宇宙自然にかゝはらず、自ら大いに頼むところあるが故ならずや。然り、吾人が萬物の靈長たるは、實に吾人の自尊心の致すところなり。而して、道德は、萬物の靈長たる、吾人が、共同生活の必要具なれば、道德は、また以て、吾人の自尊心より出づと云ふべきにあらずや、吾人は多くの不便利益を忍びても、善に就かんとするは、これ自尊心の致すところならずや、自尊心なければ、何ぞ、克己勉勵して、自己を開發し、社會を進涉せしむることを爲し得んや、たゞ安佚放縱をのみこれ事として、醉生夢死せんのみ、然るに、自己を尊きものとするが故に、遊惰安閑たる能はず、及ぶ限り、自

己を有益に、使用せんと思はん。然り、すべての徳は、自己を尊きものとして、始めて得らるべきものたるなり。これを例へば、吾人が高價の衣服にて盛装したる時は、よく注意して塵埃を避け、泥土に接せざらんと力むれども、粗服亂體ならば、態度も自然卑しくなり、周囲の汚埃をものともせざるに等し。かくの如くなれば、自己を尊重して、始めて自己の潔白を保ち、社會の改善進歩をなすことを得るなり。而して、自己の潔白を保ち、社會の進化を計るは、即ち道德的行爲なれば、道德は實に、自尊心の反射鏡なりと云ふべし。あゝ道德あるは、吾人の名譽なり。道德なきものは、自尊心あることなく、自尊心なければ人類にあらざるなり。

實に、世の進歩し、向上するは、吾人に自尊心あるが故なり。自尊心なく、愚なり、劣なりとして、他に依頼することのみせば、何等の發明するところなく、何等の向上するところなく、何時までも、野蠻の時代を脱せざる

べし。されば自尊心は、吾人をして、人類たる面目を保たしむるに必要缺くべからざるものにして、而して自尊心の反射は、道德に外ならざれば、世の進歩向上に貢献する行爲は、すべて道德的行爲と云ふことを得べし。

而も世には、道德を以て、吾人の自由行動を束縛する厄介ものゝ如く思惟する人なきにあらず。これ道德を以て、永久不變の繩規と見て、進歩發達する活動體なることを知らざるが故なり。世を改良し、進歩せしむる行爲を、道德的行爲と知らば、かゝる誤解は、忽ち消滅せん。されば、余は、一步を進めて、道德を以て、寧ろ吾人の權利なりとするものなり。何となれば、吾人々類の尊榮を保ちて、他物との混同を免れ、而して圓滑なる共同生活を爲すを得、以て、世を改良し、他物を制御するは、これ吾人の本分なればなり。

かく言へば、道德は、人類をのみ跋扈せしめて、毫も他を顧みざるが如く聞ゆれども、眞實を考ふれば、決して然るものにあらず。それ道德は、吾人の権利なり、而も権利とは、自己のみ傲然として、他を壓倒することを云ふにあらず、かくの如きは正當の権利にあらずして無法なり、亂暴なり、眞の権利とは、自己の本分を盡し得る自由の場合を云ふなり。即ち、吾人に権利ありと云ふは、吾人は、吾人の、爲さざるべからざることを、自由に爲し得るものなりと云ふに同じ、尙ほこれを言ひ換ふれば、吾人は、人類たる尊榮を有するが故に、これに伴ふ責務なかるべからず、形式のみありて、内容これに伴はざるものは空權なり、實の権利なきなり。これを例へば、私利私慾を計るは道德的行爲にあらずが故に、この種の人は、人類としての眞の権利を行ひたるものにあらず、即ち本分を盡したるものにあらず、眞の権利ありとも、これを行はざるが故に、たゞこれを空

權たらしめたるなり、否進んで、無法を働きたるなり。

これを要するに、道德は吾人の権利なりと云ふ以上は、直ちに義務の觀念を伴はしめざるべからず。そは権利と云ひ、義務と云ふも、法律上のものゝ如く、相離れて別人に屬するものにあざればなり。故に、道德は、吾人の権利なりと云ふは、道德は、吾人の本分なりと云ふを、一層強く、言ひ現はしたるまでにて、而して道德なきものは、自己の本分を盡さざるものなれば、人類としての、資格なきものと云はざるべからず。

第五節 自尊と犠牲

道德は、表面より云へば権利なれども、これが實質を究むれば、すべて犠牲ならぬはなし。平生の行爲動作も、道德的ならば、犠牲の精神に副ふものと云ふべし。例へば友人との信を守らんとせば、ある場合には、自己

の不利不便をも忍ばざるべからず。親に孝ならんとするも、君に忠ならんとするも、或は自己一人を潔くせんとするも、皆かくの如し。犠牲の精神を以てにあらざれば、よくなす能はず。管に、かくの如きことのみならず、學術の研究に餘念なき者、機械を發明して生活に便するもの、或は險を冒して世界を週遊する者、皆自己を犠牲に供する覺悟ならざれば、能はざるなり。コロンブスの亞米利加發見の如きは、尤も多くの困難を経過したるものなれば、大なる犠牲の精神を發揮したるものと云ふべし。ワットの蒸氣機關に於ける、フランクリンの電氣に於ける、皆世界の恩人を以て目さるゝは、何れも大なる犠牲の精神を以てせしが故なり。而して、これを爲すに當つてや、彼等が、如何に多く、自己の力能を信頼し、如何に多くの尊敬を、自己の精神に拂ひたるやは計りしるべからず。何となれば、彼等は自己を措きて、この大業を果し得るもの、世界にあるなし

と確信し、而してこれに、盡力せしものに外ならざればなり。これ尤も、尊重すべき、道徳的の行爲にあらすして何ぞや。

普通日常の善行爲も、すべて犠牲の精神に副ふものなれども、時により、精神上或は政治上、激烈なる變革起ることあり。かゝる時には、必ず大犠牲家起りて、自らこの改善の任に當り、而して多數の人は救はるゝなるが、この大犠牲家なるものは、自己周圍の小數人を、相手にするものにあらず、人類一般を見渡して計畫するものなるが故、多數反對者の迫害を受け、遂には身を亡ぼさざれば止まず。かの管公に見よ、清行等の勸告に従ひて、速かに退引したらんには、追竄の厄は免れしならんも、國を思ふのあまり、しかする能はざりし所以のものは、彼の胸中、自己を措きて、他に自己に代るべき適者なしとの自尊心を以て、遂に犠牲たることを覺悟せしに外ならざるなり。近くは、佐久間、西郷の徒あり、何れも一世の

醒覺者を以て自任したり。孔子、釋迦、基督、ルートル等皆云はずして明かなり。かくの如く、國を思ひ、人類を思ひて、多くの反對あるにかゝはらず、進んで改善の任に當るものは、何れも大自尊家にして、而して、犠牲たることを、甘んずるものなること明かなれども、かゝることは、政治上、精神上に於てのみならず、工業界、商業界も同じきなり。即ち自己の、發明計畫を世に擴めんには、大なる困難に遭遇せざるべからず、四方に競争者あり、反對者ありて、自己を妨害あつゝあり。これらの妨害を打破して、直進せんとせば、また大いなる犠牲の精神を要す。

かくの如くなれば、有形界無形界を通じて、衆人の爲め利益幸福を企圖せんには、始めより、自己の、犠牲者たることを覺悟せざるべからず。而して、この覺悟、この大慈悲心は、世に我れより偉きものなしと悟る心より發するものなることは、既に言ひたる如くにて明かなり、何となれば、

若し我れより偉きものありとすれば、我は其者の犠牲によりて、救はるべき、多數の中に入らんと思ふは、必然なればなり。犠牲者たらんか、多數中に入らんか、抑も吾人は何れを撰むべきか、大覺悟、大決斷を要するは、實にこの點にあるなり。

實に、大自尊家は、大犠牲者なり。例の南洲に見よ、彼が少時よりの英氣と、力能とは、よく彼をして、多幸多福の生涯を送らしめしならんに、彼は、かゝる安佚怡樂に甘んずる能はず、進んで國家人類を救はんとし、千辛萬苦を経過して、遂に身を犠牲に供し終りたり。コロンブスもまた然り、大陸發見せんとの、大冒險を企てずば、航海中の大危険は經驗せざりしならん。マゼランの如きは、遂に身命を失ひたり。學者、宗教家に就て見るも、また同じ。彼等は何れも、常人に優りたる才能を供へ居れば、格別の努力を要せずして、幸福快樂を享受したりしならんに、自ら進んで犠牲と

なりたり。かくの如くにして、彼等の肉身は終りたれども、崇高なる精神と、偉大なる事業とは、永久に活躍して、世界に輝き渡るなり。而も、こゝに、一の疑問あり、何ぞや、この種の人物は、生時多くの勞苦を厭はず、孜々勉勵するものなるが、それは自分勝手のことなれば、如何に苦痛多きも致し方なけれど、其影響、近親或は朋友に及びて、時に、不孝不親切となるが如きは如何との事なり。かゝる場合は、上に述べたる大犠牲家を始め、古來、幾多の人の、遭遇せしところならん、而して吾人の生存する今日はまた、進歩變革の眞最中なれば、新舊の衝突殊に甚だしく、不孝不信の譏りを免れざること往々あるなり。氣弱き者はこれを恐れて、自己の本分を盡す能はず、恨を抱いて終るあり、或は煩悶して心身不健康となるあり、而も幸にして、自己の職責を覺り、權利を知り、而して勇奮邁進するに至るも、自己の生涯は殆んど勉勵にて終るものなれば、近親たる者、愚にして

安佚をのみこれ願ふ者ならば論ずるに足らず、苟も然らず、幾分なりと、其勞を分擔するものは、また必ず其報あるべきなり、即ち大犠牲家の近親或は知己たる者は、其生時は、多く幸福なる能はざれども、其親密なる程度だけ、又其勞苦を分ちしだけ、それだけ多くの光榮を、後世に於て擔ふことを得るものなり。

第五章 宗教は如何

第一節 宗教の意義

(116)

知識はすべて、相對界に限らるべきに、哲學はこの相對界を離れて、絶對に其大體を置くものなる故、推理論究自由にして、従つて、其論に眞偽なきことは、既に業に知り得たるところなり。而して、宗教もまた、相對以上に出出して絶對界に入り、信仰を以て其基礎となすものなれば、哲學と基礎を同じくするが如き觀あり。然れども、哲學の絶對と、宗教の絶對とは同一ならず、哲學の絶對とは、理論上の自由の義にして、何等の標的なき空漠たることを云ひ、宗教の絶對とは、實驗以上の境界をしか云ふまでにして、何等標的なき哲學の如きものにはあらざるなり。されば宗教は、絶對なりと云ふと雖も、これたゞ、實驗以上のものなり。

(117)

と云ふまでにて、眞の絶對にあらず、必ずある標的なくばあらず、この標的なければ、哲學の如く、眞ならず、偽ならず、何等の權能もあらざるなり。然らず、宗教をして、意味あり、權能あらしめんには、かくの如きものにて止ましむべからず。然らば、如何せば可なる。即ち哲學の、絶對自由無限のところを以て、念或は信念と名づくれば、宗教の本領は、信仰ならざるべからず、單なる念或は信念は殆んど無意味に等しきものなれども、信仰と云へば、崇敬し、仰慕する精神状態なるが故に、人心を支配し、拘束するものとなるなり。換言すれば、宗教の基礎は、如何なるものならざるべからざるかと問はゞ、空漠たる信念ならずして、熱誠なる信仰ならざるべからず、この信仰たるや、無論人生に對して、大權威あるものならざるべからず、即ち宗教は、根據を信仰におきて、道德界に、其枝幹を張り出すものならざるべからずと云ふなり。

抑も、絶對自由は、殆んど無意味なりとは、これを言ひ換ふれば吾人の行爲に對しての價値、皆無なりと云ふことなり。前にも言ひたる如く、哲學は學なり、研究なり、されば宇宙人生は、かくの如きものならんと想像すれど、かくせよと命令するものにあらず、命令すべき性質のものにあらずるが故に、自由自在に發言することを得るなり。例へば、人には精神あり、塵埃にも精神あり、人畜萬物すべて同一祖より出づれば、宇宙悉く平等にして、何等の貴賤なしとか、或は「今の世には、善人と惡人とあり、善人の爲めの神あり、宗教あらば、惡人に好都合なる神と宗教となかるべからず」とか、或は如何なる手放題も、勝手に云ひ得るなり。これ哲學は學にして研究なればなり。然るに宗教は教なり、命令なり、相對以上に超出して、而して示す教なり、法なり、故に吾人よりしてこれを信仰とは云ふなり。この信仰の觀念たるや、次の如くなるべし。即ち、吾人若し善にして

不幸なりとも、世界果して偽ならずば、他日必ず、これが報いあるべき筈なり、これに報ゆるあるものあるべき筈なり、このあるものは、目以て見るべからず、耳以て聞く能はざれども、是非あらざるべからざるが故に、吾人はこれを信仰するなり。而して惡にして榮えしものには、大なる恐怖を懷かしめ、以て、後悔慚愧の念を起して、これを改悛せしむるものなりと、かゝる信仰、これを宗教の基礎となさざるべからず。されば信仰なるものは、吾人が自由思想の最後のものにして、即ち眞理の極にして、行爲動作に密接の關係を有するものと云ふを得べし。

かくの如き信仰を基礎として、宗教は成立すべきものなれば、無論相對界の知識とは異なれども、この知識に反對し、矛盾するものにはあらざるなり。否、この知識ありて、始めて眞信仰眞宗教は形成せらるゝなり。然るに、世には、宗教は絶對なり、自由なりとの言を以て、單なる哲學的信

念をそが成立の基礎となし、道德上、處世上、有害なりや、否やを顧みざるものあり。かゝる宗教家は、宗教を以て、罪を犯せし者を救ふが如く言ひなし、これを矯正し、改善せしむることに、重きを置かざるなり。而して揚言して、宗教は相對以上のものなり、子々たる道德何かあらんなど云ふ。若し其非なる所以を攻むれば、忽ち漠たる、哲學的信念の影に隠れて、言を左右にす。即ち彼等は云ふ、悪人あり、悪事あるは、不完全なる社會の罪なり、社會を攻めずして何ぞひとり、個人を攻むるを得ん、然れば、神佛も、これを罰することを得ざるなり、否、罰することを得ざるのみならず、かく悪を爲さねばならぬ者こそ憫然の極なれば、これらの者を、一層深く愛するなり」と、或は、宗教は信仰を以て基とするが故に、たゞ熱心に、何事もなくこれを信じ、これを頼みて疑はざれば、往生成佛疑ひなし、行ひの如何は問ふところにあらず、然るに智者學者は、自己の力を以て、種々考

察し、疑惑して、而して他に依頼する心、愚者悪人より弱き故、其恩惠を蒙ることも少なきなり。宗教は無智無學にして悪なるものを、第一に救済するなり、これ彼等が無智なり、悪なる故を以て、他に依頼する心、深ければなり」と、恰も悪人の傳播を力むるが如きものあり。或は「善惡正邪等と云ふも、これ吾人の想像なり、真にかゝる區別あるにあらず、善必ずしも善ならず、惡必ずしも惡ならず、宇宙の大より見れば、これらの假想は畢竟無意味なり、論するに足らず」と、かくの如き有害なる宗教あるは、實に慨歎の至りならずや。

要するに、宗教の基礎は信仰なり。信仰は知識にあらざれば、説明し、論議すべき性質のものにあらざれども、説明し論議すること、能はざるものにはあらず。而して又、知識に反するものにもあらざるなり。否、知識の極は、最高眞理、即ち信仰に到達せざれば止まざるものなれば、信仰は、知

識以上の知識ならざるべからざるなり。

第二節 宗教と道德

吾人が社會に於ける心意行動を樹木に譬へ、それが成立の要素を、宗教及び道德なりとすれば、宗教は地中の根にして、道德は幹葉なり、花を開き實を結ぶは、幹葉のなすところなれども、これをして然らしむるは、根あるによるなり、行爲動作もまたかくの如し、道德あるにより、其正善を保たしむることを得れども、これを鞏固にし、安立せしむるは、宗教の力ならずんばあらず。

試みに宗教道德を比較すれば、左の如き差異點を發見すべし。

- 一、宗教は精神的にして、道德は現實的なり。
- 二、宗教は個人的にして、道德は社會的なり。

三、宗教は出世間的にして、道德は世間的なり。

一、宗教は信仰なるが故に、精神内のものなり、これを實行に現はすと、現はさざるとは、問ふところにあらず、神を信するも、また佛を信するも、或は大いに感ずるところありて、社會人類の改善を企圖するも、皆信仰心の致すところなり、然れども未だ實行に現はさざれば、道德とは言ふべからず、如何なる思考も精神内に止まる時は、宗教的と云ふて可なり。然るに道德は現實的のものなれば、心に企圖するのみにては足らず、是非これを實行に現はさざるべからず、即ち吾人は、自己の信仰を實現する爲め、動作し行爲するにあらざれば、道德にあらざるなり、而して行爲動作は、宗教的信仰ありて然るもの多ければ、宗教道德の關係は密接なりと云ふべし。

二、共同生活に缺くべからざるものは、道德なり、道德なければ社會は

一日も安穩なる能はず。宗教もまた道德と共に、社會に必要なものなれば、これに相反せざるべからざるは勿論なれども、宗教は畢竟信仰にして精神内のものなれば従つて個人的にして、又自由なり、そは宗教心は、吾人と、吾人以上のある有力者との結合する精神状態なれば、たゞ兩者の關係のみにして、それ以外の何ものをも容れざればなり、されば吾人はこの境涯に於てこそ、何等の秘密もなく、何等の隔りもなく、尤も自由に自心を語り、希望を述ぶることを得るなれ。かくの如き自由の境なれば、こゝに入らんとするにも又従つて自由なり、自己の直覺にても、學理上にてても、或は古來よりの宗教にても、或は自己の想像にても、何れによりても得らるべし。これ信仰なるものは、吾人が正當なる思考力の、自由の極度に達したるものなればなり。而してこれ精神内のみのものなれば、また個人的なる所以なりとす。

道德はまた吾人の自由意志を以てするものなれば、他に拘束さるべきものにあらざること勿論なれども、こは精神内のものにあらざれば、時勢の如何を考へ、人類の智慧を考量して相緩急せざるべからず、これ道德の社會的なるを以てなり。

三、同じく現世を説けども、宗教はまた未來をも云ふなり、否其未來、即ち現實現世を超出したる精神界を其本陣とするものなり、この世界は信仰の世界にして、現實現世の完結して其缺欠を補ふところなり、されば現世の行爲如何により、吾人に幸福を與へ、又は苦痛を感せしむ。故に宗教は出世間的にして、知識以上なりと雖も、世間の道理、世間の知識に相反すと云ふにはあらず、只其區域を異にして、一は世間的、一は出世間的なるのみ。

道德は吾人が現世の活動に關するものなれば、如何に理想は高尚な

りとも、到底人間社會に於て、實現さるべき見込みなきことを爲さんと
 するが如きは不可なり、かくの如きは、理想にあらずして妄想なり、例へ
 ば如何に熱誠なる信仰ありとも、そはたゞ精神内のみのことなるに、現
 實界にまで推し及ぼして、以て、ある有力者により現世の物質的變化を
 來さしめんとするが如き、或は又吾人が誠心誠意なるの故を以て、未來
 永劫天變地妖なからんことを祈るが如き、何れも精神界と現實界とを
 混同したる誤謬より起るものにして、決して、真正なる理想と云ふこと
 能はざるなり。かゝる欲望を實現せんには、信仰のみにては足らず、吾人
 の怠らざる研究と努力とによつて爲さざるべからざることたるなり。
 而もこの欲望たるや、たゞ精神内のみの計畫に止まらば、決して迷信に
 あらず、これを空想とは云ふなり。

以上の如く、一は精神的、個人的、出世間的、一は現實的、社會的、世間的な

るが故に、吾人は處世の第一法として、無論道德を採らざるべからざる
 は言はずして明かなり、何となれば、この世界は共同して生存し、而して
 行爲活動斷えざる世界にして、孤立靜止の世界にあらざればなり。植物
 は根なければ生存する能はざれども、根のみ蔓りて、肝腎の幹葉乏しけ
 れば、遂に樹木としての効なき如く、宗教心のみ堅固なりとて、實行之に
 伴はざれば、即ち道德的行爲とならずば、吾人は世にありて畢竟何の効
 かある、樹木の樹木たる價值は、其枝幹の働きにあり、吾人も人としての
 價值は、そが道德的行爲の多少にありて存するなり。

されば宗教は、道德其ものに對しては補助者の地位に立ち、吾人を慰
 藉し、激勵する力あるものなれども、たゞこれのみにては處世法として
 の効はあらざるなり。而も道德的行爲、即ち人道を履行するに當り、千辛
 萬苦をものとせず、奮然進んで止まざる勇氣と熱心とは信仰の力なら

ずんばあらず、信仰力の吾人を動かすこと強大なるは、今更喋々を要せざるなり。

第三節 眞信と迷信

由來、吾人は、實驗觀察の及ばざるところをまで想像し、欲望するものなり、この想像し、欲望するところは、所謂信仰の境地なるが、世には實驗し觀察する能はざることは、すべて偽なり、妄なりとして、これを迷信とし、云ふものあり、然れども吾人の心は、かゝる明々白白々眼前見ゆる事物にのみ止まる能はず、必ずある想像を描きてそれ以上に及び以て満足するものなり、而もこれ實驗を離れ、觀察の及ばざることなれば、何れが眞信にして何れが迷信なるか、確たる證據を擧げて説明する能はず、甲論じ乙駁し、未だ容易に問題の落着を見る能はざるが如し、こゝに於て余

は余の意見を述べざるべからず。

先づ眞信仰とは何ぞや、眞信仰は宗教の基礎にして前に既に言ひたる如く一定不變動かすべからざるものなれども、人により大いに異なるが如く見ゆるは、各人智識の差あるにより、眞信仰に到達する徑路に遠近あるまでなり。

例へば人長夜獨居する場合ありとせんに、智識あるものは、妖怪などのあるべき筈なしと知るが故に、更に恐るゝことなけれども、こゝに無知なるものありて、妖怪の出現を信じ居たり、而も其人眞信仰あらば、自己の平生を顧みて、心中疚しきところなく、たとへ妖怪我れを脅かすとも、神佛は必ず加護を垂れ給はん、而して妖怪は邪にして神佛は正なれば、正の邪より強きは慥かなりと、かくの如く思ひて、彼は安心することを得るが如きこれなり。

各人智力に差異あるが故、其程度により、種々なる心的状態あれど、歸するところの信仰なるものは、決して變りなきなり、學者無學者或は賢者愚人によりて變るものにあらざるなり。

扱て然らば迷信なるものは如何、これに二途あり即ち

- 一は精神界と物質界とを混同したるもの
- 二は智識をすべて妄なりとするもの

第一信仰なるものは吾人が精神内のみにて行ふものなるに、これを以て物質界にまで及ぼし、而してそれが變化を來さしめんとするが如き場合なり。例へば我が子の病を癒さんとして神佛に祈願し、其助けを借らんとするが如き、或は入學或は卒業試験に合格したしと祈るが如き、何れも精神界と物質界とを混同したるものにして、これを以て、病兒を癒し、試験委員を動かす得るものと思はゞ、實に迷信と云ふの外なし、而

も祈願の効により、病兒を癒し、試験委員を動かすことを目的とせず、只自己の安心の爲め、或は奮勵の爲めとすれば迷信にはあらず、眞の信仰なり、何となれば愛兒の爲めに能ふ限りの手を盡し、心を盡して、最早や人力の及ばざるところに達すれば、次には神佛に祈りて諦めをつくるは當然なればなり、親としての至情なればなり、試験の場合もこれに同じ、學生たる者不斷怠らず勉強したるが故、其赤心に對して神佛は加護し給ふならんと思ふは自然の情なり、而もこれ神佛の加護を仰ぐにあらず、自己の及ぶ限りを盡したるが故に、心残りなくなり、若し不幸にして不合格なりとも、敢へて後悔することなく、誠に泰然自若たるを得るが故に、この泰然たる、而も以後に於ける希望の光輝を認め得るが如き心狀、これ神佛の加護なりと見ることを得ればなり。

第二の場合、吾人の知識を全然妄なり偽なりとしてたゞ信仰のみ

を眞なりとするなり。智識にても或は道德にても、吾人の如き微々たるものゝ手に成りしことは、すべて偽なり誤なれば、根本よりこれを捨てゝ一意信仰にのみ依頼せよと云ふなり。あゝこれ何たる迷言ぞや、而も衆人の愚なるかゝる迷言を信じてそを實地に行ふ者多きは實に慨はしき次第なり。余は曾て、ある女、他人の所有する池に蓮の花の美しく咲けるを見て、これを自家の佛前に供せんとし、子供にこれを取り來れと命じつゝあるを聞きたり。この女は子供をして花を盗ましむるを、左程悪ろしと思はざる故、特に小聲にて命じたるにはあらず、花の持主にだに咎められずば、何人が聞きたりとて、決して耻かしきことにあらずと思ひ居るなり、これ佛の御爲めには何事を爲すも可なりと信じ居るが故なり、而して盜品を佛前に供して晏如たり。知識道德を誤謬として、たゞ佛を信せよと云はゞ、遂にはかくの如き結果となるは當然ならんと

余は實に戰慄したり。

又或る人は佛の御心に叶はせんとして、負債の爲め差し押へられんとする知人の財産を隠匿し遣りて、大なる慈悲の行爲の如く心得たることあり。すべてこれ善惡を轉倒せるのみならず、宗教の個人的なる、従つて精神的なることをしらず、現社會の實行上にまで押し及ぼし、而してこれを誤解して、大害を爲すことに氣付かざるの致すところなり。猶ほ眞信迷信に就て究めんには、これらの念の起る實際の場合を考ふれば自ら判然せん。先づ人があることを信ずとは眞にても迷にても自己がこれまで實驗し來りたる事柄を、未だ實驗せざるところに持ち込む場合、即ち相對的、可知的の事柄を、絶對的、不可知的に持ち込む場合なりとす。

即ち前に擧げたる現世に於ての不可思議力の有無を考察する場合

の如き、或は未來世の有無、其狀態如何等を判斷するが如きこれなり。かくの如き事柄はすべて信仰の問題なるが、其信仰なるものは、無論知識に超絶したるものなれども、而もこれに違反するものにあらず、違反すれば迷信なり、何となれば信仰の場合、從來經驗し、實驗し來りたる事柄に就てのものにして、即ち自己の知識と全然無關係のものにあらずればなり。若し無關係の事柄あらば、信仰なるものに、眞迷の區別はあらざらんも、自己の知識と全然無關係の事柄は、あり得べからざる事にし、またこれに就て、信仰心の生ずる謂れもなきを以てなり。かくの如くなれば、自然の推論として、眞信と迷信とは、左の二ヶ條に歸着するを知るを得べし。

眞信とは、知識に衝突せずして、而もこれに超絶したる心なり。迷信とは同じく知識に超絶したるも、これに衝突する心なり。

人若し自己の信仰の眞なるか、迷なるかを知らんとせば、右の準繩に照すべし、忽ち判然せん、例へば

未來世に關して曰く、吾等凡愚、たとへ現世に於て惡を爲すも、未來は神佛の加護によりて往生成佛疑ひなし、と思はゞこれ迷なり、何となれば惡因を以て、善果を得んとするが如きは、吾人の知識到底これを許さざればなり。これに反し

吾人は誠心誠意善事を爲すも、不幸にして禍しきりなり、現世に於てかくの如くなるも、未來は必ず冥福を得ん、これ吾人の信じて疑はざるどころなりと、この心は實に眞信なりと云ふべし。

第四節 未來世に就て

未來の意味に就ては種々の解釋あらんも、これを大別すれば二とな

る、一は現實的、一は精神的なり、現實的とは現世其儘の繼續を云ふものにして、明日も未來なり、明年も未來なり、否明日明年はおろか、今の呼吸の其次よりは未來なり、精神的とは現世其儘の繼續にあらずして、別個の幽冥界を指すものなり、即ち吾人の死後靈魂の到るべきところを云ふなり、この説にまた二の別あり、一は物質不滅、勢力恒存等の説を論據としたるものにて、吾人の精神は死後、肉體より離れて宇宙の各所に彷徨し、種々變轉すれども、永劫消滅せざることを、恰も塵埃草木の枯死腐敗して、窒素水素等の元素となり、又結合して種々の物體となるが如し」と云ふなり、されば、この説にては、未來世は實有なり、精神は不滅なりと云ふと雖も、木燃えて烟となり、雲となり、霧となり、雨雪となり、尙ほ轉々變化絶ゆることなきが故に、木は不滅なりと云ふ論法なれば、かくては全體としては不滅ならんも、精神其ものゝ不滅とは云ふ能はざるなり、右

の言ひ方にては、吾人の精神其ものゝ不滅の説明とはならざる故、從つてこの説にての未來世は吾人に取りて殆んど無意味のものなり、かゝる無意味のものはさておき、

「現世に於ては吾人の理想とするところの全體を實現せんこと覺束なし、而も理想は實現せで止むべきものならねば、必然未來世はあらざるべからず、されば未來世は現世の事業の完結するところにして、吾人をしてこれを思ひて果敢なき生涯をも眞面目たらしめ、以て善を爲し悪を爲さざることの愉快を深からしむるものなり、かくの如くなれば個人的精神の永續は勿論、現世に於ける吾人の行爲に就て、正當なる應報あるべき處なり」と、來世の有なる説として、尤も宜しきを得たるものと云ふべし。

人あり云ふ、宗教は人心の弱點に投ずるものなり、氣象活潑勇氣ある

ものには必要なきなり、と余はしか思ふ能はず、何となれば宗教に限らず、哲學科學、文學美術等すべての學問研究は、人類未だ完全ならずして不知或は半解の事物多ければなり、完全圓滿にして少しの不足なき境界に到らば、宗教のみならず、諸科學術の研究もまた不必要となるべければなり。

然り、人如何に博學なりとも、其時代の知識に精通したりと云ふまでにて、世界開闢より終局までの事物を知悉したりとは云ふべからず、物的方面に於てかくの如くなれば、心情に於てもまた完滿なりとは云ふこと能はず、而も衷心に信仰あり、理想あるが故に、これに依つて自己を指導しつゝあるなり、時代知識に精通したる大學者にして既に然り、未だ其半ばにも達せざるもの多き社會に於ては、精神界も不完全極まるは別に異とするに足らず、されば宗教なるものありて、衆人これに歸依

すればとて、これを以て人間の弱點と云ふ能はざるなり、これを要するに、學術研究の必要とする時代は、精神界も未だ完全なりとは云ふ能はざるが故に、宗教の必要もあり、信仰の止むべからざることもあり、而してまた幽明界の區別も生ずるなり、而も精神界は個人的にして自由なるが故に、物質界の不完全なるにも係はらず、信仰に於ては、た理想に於て、現世に於ても時々これに到達することを得べきなり、而して未來に於ては、永劫不變に實現せられざるべからず、又現世に於ける感念と未來のものとを、一貫せしむることをも得られざるべからず。

個人的精神の不滅を否定する來世觀は取るに足らざれども、現世の延長の未來、及び理想實現の精神的未來は實有ならざるべからず、而して前者は道德的にして、後者は宗教的即ち信仰なり。

前者は普通に後世と稱するものにして、吾人生時の行爲の批判せら

るゝ處なり、吾人は理想實現を未來世に於て期すれども、これ止むを得ざるが故にして、能ふべくんば現世に於て、眼前に仕遂げたきものなり。而も實際は、生時はおろか、死後所謂後世に於ても至難事ならずんばあらず、否これ絶對的不可成なりと云ふにはあらず、進み進みて完全なる世界となりたらんには、必ず實現せらるべきものたるなり。而も吾人は現實界に於てはかくの如き圓滿なる境涯の容易に到らざることを知るが故に、従つて死後の批判の當らざることあるをも覺悟せざるべからず、或る時期間はこれを貶し、次にこれを賞するが如き場合多々あり、歴史はこれを證す。これ未だ完全ならざる世界の已むを得ざるところなり。而もこれ未だ完全ならざる故にして現實界の性質にあらざれば、吾人は生時能ふ限り盡力して、斯の如き不平不滿なからしめざるべからず。これ吾人の最大要務なり。

幽冥界一名精神的未來は、現世に於ては單に理想なり。屢々云ふごとく冥人は現實界の完全圓滿を絶對的に不可能なりとは思惟せざれども、到底短日月間に成就すべしとも思はれざれば、物的障礙なき精神界に於て、早くそを實現し得べしと思惟するは正當なる信仰なり。かゝる信仰あればとて、そは吾人の利己心よりするにあらず、現實界の妄ならずして、真理の嚴然たるを信するものゝ避くべからざる決論なるなり。

第六章 運命と自由

第一節 運命とは何ぞ

人事の變轉極まりなき社會の狀態を考へ來らば、何人も運命なるもの、奇しく怪しき力を思ひて、これに驚嘆せざる能はず。一朝志を立てゝは懐かしき田園を捨て、都の人となり、辛苦慘膽一刻の心を安んずる暇なきも、而も身を臥床に横ふるの時、誰か故郷の友を思ひて自己の運命の異なるを覺らざらんや、若しも不幸にして志を得ず、空しく立ち歸らざるを得ざる境涯ともならばまた其感慨いかばかりなるか、

あゝ昨日までは忙閑煩雜の爲めに深くも思はざりしを、今寂寞の郷にありては、多種多様の想念むらゝ起りて禁する能はず、昨日は都人、今日は田舎人、あゝかゝる變化は何故なるか、ある人はこれを天道なり

と云ひ、ある人は神の攝理なりと云ふ、而も自己の心底には、これらの語によつて満足する能はざるある凝塊なり、如何なる慰藉も到底充分に効力ある能はざる如き疑念あり、即ちある時は運命なりと諦め、ある時は自己の致すところなりと思ひ、半信半疑の狀態に陥りていよゝゝ煩悶を深からしむるなり。若年輩の免れ難きところにして、早く確たる信念に到達せざれば、心身共に病弱ならしむる恐れあり。こゝに於て、これらの人々の爲めに、運命なるものゝ有無及び其如何なるものなるかを一言する必要あるなり。

抑も吾人は、運命てふ神秘的なるあるものに支配されてあるか、或は自己の自由意思を以て活動しつゝあるか、運命に支配さるゝと思へばしか思はれざるにあらず、自由に活動するものと云へばしか云はれざるにあらず、何れにても眞なるが如く、甚だ曖昧の觀なき能はず、かゝる

曖昧を避けて問題を明瞭ならしめんには、先づ運命なる語の意味より究めざるべからず。

然らば運命とは何ぞや、運命とは、ある計りしられぬ力が、偶然吾人の下す機會若しくは出來事をば、後に至り回顧して、あゝこれ運命なりきと云ひ、又今現に遭遇しつゝあることにても、其事たる普通以外のものにして、而して其原因は矢張り過去に屬すべきものなるが故に、これまた運命なりと云ふなり。されば運命なる語の特徴は神祕的にして現代的ならざるところにあり、但しこれを廣義に解すれば、現在はおろか、將來の企圖をも、すべて運命中に攝すること能はざるにあらず、自己の自由意思を否定して、自然の勢力をのみ尊崇するものは皆この類ひなり。これらの人は、吾人同類は云ふに及ばず、天地萬物、大小細太、悉皆運命の支配するところなりと云ふなり、見やうによりてはかく云はれざるに

もあらず、例へば

ガリレヲが燈籠の動搖するを見て、時計を發明したる如き、安國寺が秀吉の手の筋を見て、占業を捨てたる如き、若しかゝることなかりしならんには、時計の發明もなく、安國寺もまた生涯占者として終りしなるべし、然るに安國寺が偶然秀吉に遇ひ、ガリレヲも偶然に燈籠を見たり、これ運命の然らしむるところにあらずして何ぞや、且つガリレヲが丁度其時振子の振動に就きて考察し居らざりしならば、たとへ燈籠を見るも時計を發明するまでには至らざりしやも知るべからず、安國寺もまた然り、更に秀吉に遭遇することなかりしならんには、たとへ遭遇しても、秀吉が乞食姿にてあらざりし時ならんには、驚きて職を抛つまでには至らざりしならん、運命の不可思議なる力は兩者をしてかくの如くならしめたるなりと。

右の如き例は數ふるに遑あらず、これを以て運命といはゞ、一舉手一投足より、一言一笑、一事一物、すべて運命ならざるはなし、而して宇宙人生は運命の巢窟と云ふべきが如くなれども、翻つて人心の方面よりこれを言へば、皆自由意志の致すところならずんばあらず、即ちガリレヲならざる人が燈籠を見しとて、何等の効果もあらざるべく、安國寺ならざる人が、秀吉を占ひたりとて、職を捨て、學に志すまでには到らざるべし、故に例令燈籠を見ざるも、秀吉を占はざるも、ガリレヲの腦力あり、安國寺の奮發あらんには、同様の結果に到達せしを保證し難きにあらず、されば一面運命なるが如きも、實際の效果あらしむるは、慥かに自己の決意によることを思はずんばあらず。

又天變地妖等に就きて見んに、時ならぬ大海瀟に父母兄弟を浚はれて孤兒となり、養育院に入れられたりと假定せば、この孤兒の養育院に

あるはまた運命なりと云ふべし、或は孤兒となり、依つて身邊の纏綿なき爲め、却つて立身出世を速かならしむることあるべし、かゝる立身出世また運命なりと見るを得べし、或は又暴風に吹き飛ばされて、遠海の孤島に漂着したる、ロビンソンクルソーの如きも運命中の人たるなり。

かくの如く偶然の出來事、若しくは天災に限らず、地妖に限らず、すべて運命なるものは、其遭遇する人に取つては、起因全く預期せられざるが故に、たとへ如何なる變化ありとも、如何なる災難に出遇ふとも、吾人は決して其責を負ふべきものにあらず、吾人は自己の及ぶ限りを盡して、猶不意の禍にかゝりたりとも、致し方なきことと云はざるべからず、これ吾人の智力の微少なるが故なれば、益々奮勵して宇宙の秘奥を撮くことを力めざるべからざる所以なり。

以上の如くなれば、大小無量の偶然なる場合、若しくは自然力を指して普通に運命と名づくること明かなり、かくの如きものを運命なりとすれば、其有なることは無論にして、而して行爲活動断えざる宇宙間には何所にもこれなき能はず、さればかゝる意味の運命を以て、あるかなきかと論ふほどの愚はあらず、萬事萬物すべて運命の産出するところなり、而も吾人はこれに支配さるゝかされざるか、即ち自然に従ふか、若し其自然なるものが、吾人の目的に反對ならば、奮つてこれに逆ふかは、吾人の自由なる決断に俟たざるべからざるなり。

第二節 自觀と他觀

萬有は究め究むれば、其根元の、無差別に歸するものなることは、既に論述したり、即ち精神と云ひ、物質と云ふも、畢竟自觀と他觀との相違の

みなることを見たるなり、萬有の實質に就て既に然れば、諸科學術を始め、あらゆる事物に差異あり、區別あるが如きは、皆この自觀と他觀の二面あるより出づるものならずんばあらず。

先づ哲學に就て見よ、其系統如何に多々なるも顯著なるものは、唯心唯物の二論ならずや、而して唯心論は自觀の極にして、唯物論は他觀の極ならずや、宇宙事物と、自己の心とを假りに相對象せしめて、こは机なり、こは友人なりと、自心を以て認識すれど、こは假りにそれらを實有なりとして對象したるまでにて、自己の心なければこれを有なりと認むる能はず、即ち絶對に有なりと云ふにはあらざるなり、されば唯心論は自心ありて始めて萬有あり、自心なければ何者もあるなしとする説なれば、この何ものも相對象せざる場合これ自觀の極ならずや、唯物論にては、自己の心を以て他事物を觀察し、推理して、結局精神も物質の一作

用なりと断定し、而して其断定したる自己の心も同じく物質の作用なりと云ふ、即ちこの説にて自己の心も物的なりと云ふは、他人の心も物的なりとの故を以ての結論なり、自己の心を外面より見る以上の他観何れにありや、故に唯物論は他観の極なること明かなり。

宗教に就て見るもまた相同じ、宗教にては自力他力と云ふ、自力にては云ふ吾人善ならば善果を得、悪ならば悪果を得、即ち己れより出づるものは己れに歸ると云ふ意味のものなり、これ信仰の自觀なり、他力にては、吾人を始め宇宙萬有悉くある最大有力者即ち神佛の支配を受け居るもの故、善を爲すも、惡を爲すも、すべて吾人の關するところにあらず、吾人は實は善惡其ものゝ區別をすら爲し得ざるなり、たゞ吾人は神佛を信じ、恭儉にして眞面目ならば可なりと、これ人生を他觀したる極にあらずして何ぞや、吾人は如何に自由意志を以て働き、社會は如何

に目的を意識しつゝ進めばとて、これを外面より見る時は、即ちこれを他觀する時は、自覺あるも見えず意識あるも分らず、盲目的に蠢動するが如ければなり、事物を他觀するは、すべての生命を消滅せしむるものと云ふべし。

次に倫理説は如何、先づこれが代表者として良心説、自己實現説を擧げん、前者にては、凡ての行爲は良心の命令に従へと云ふが故に、自觀なること明かなり、後者は自己の天職を遺憾なく發揮して、更に不満を感ぜざる状態を可なりとするが故に、前者を他觀したるものならずや、又向上主義に就て見ん、こゝにも自他の二あり、前者にては、自己の善なりと思ふところに奮進せざるべからず、事の難易は問ふなかれ、主義は生命よりも貴し、主義の爲めには生命を捨つるも却つて本望なり、人道の爲めに大いに奮進せよ、人道に合するものは榮え、合せざるものは亡ぶ

るなり、換言すれば善ならば榮え、悪ならば亡ぶと云ふなり。後者即ち他觀にては、吾人の祖先は千辛萬苦を嘗め盡して奮闘し、而して境遇に適するものは榮え、適せざるものは亡び、以て今日の社會を醸成せり、故に今日の社會とてもこれに異ることなく、境遇に適するものは榮え、適せざるものは亡ぶ、然れば盛昌なるものは善にして、衰微せるものは悪ならざるべからず、と云ふなり。前者は善なるが故に榮え、悪なるが故に亡ぶと自觀すれど、後者は榮ゆるものは善にして、亡ぶるものは悪なりと云ふが故に全く社會を他觀したるものなり。

其他文學美術等すべて自他の觀あらざるべからず。たゞにこれらのみならず、吾人が日常思念する一切事物にも、悉く自他の觀あらぬはなきなり、而もこゝには一々枚舉するの煩を避け、たゞ尤も著しき例を擧げて、以てこれを明かにせん、これを吾人對運命或は神となす。

運命とは前に言ひたる如く、人事の偶然なる出來事を始め、宇宙自然力の直接或は間接に吾人に及ぼすことの總稱なり、即ち自然力の吾人に及ぼしたる如き場合を運命と云ひ、然らざる時は單に自然力と云ふなり。而してこれを運命と見るは吾人よりこれを他觀したるものにあらずや。然り、運命なるものは儘かに吾人を包圍すれど、これを有なりとするは、吾人自心を以てこれを他觀したるが故ならずや。自觀すれば只吾人の自由意志あるのみなり。

運命に就て見たるところはまた神にも應用すべし、即ち神は世の眞なる限りこれあらざるべからざるものなれども、これを有なりと見、又これを尊敬するは吾人に心あり、而して人たるの自尊心あり、而して又これを他觀したるが故ならずや。然り吾人に心ありて事物を他觀するにより始めて神あるを知り、宇宙萬有あるを知るべきなり。他觀せず自

觀のみならば、只自己の心あるのみなり。

吾人は宇宙事物を研究する時、通常これを他觀すと云ふ、即ち山を見川を調べ、空氣を分析するが如し、これ有形界に於てのみならず無形の精神界に於てもしかするなり、運命を考へ、神を尊び、人を愛するが如し、同じくこれ他觀なり。他觀とは自己の心と事物との相對したる場合を云ふなり。相對するものなき場合は自觀なり。即ち自觀すれば自心の外一事一物もこれあらざるなり。

されば學理と云ひ、技術と云ひ、信仰と云ひ、情念と云ひ、すべてこれを考へ、これを敬し、これを愛憎する等自心以外の標的あるものは、悉く他觀ならざるはなし、而して其内又それごとく自他の別あることは、以上に述べたるところの如し。

要するに、宇宙人生の問題は、自觀と他觀より外なきものにして、遂に

はまた自觀の一に歸着すべきなり。何となれば、宇宙萬有は元と吾人の精神作用即ち他觀することによりて、始めて生ぜしものなればなり。

第三節 大悟せよ大觀せよ

吾人は既に、宇宙萬有人生の一切は、すべて自觀と他觀との相違より生ずるものなることを知りたり、然らば、何ぞ進んで大觀せざる、而して大悟せざる。人の鬱々晴れざるは、この最要點を看破せざるが故なり。これを看破せば、心身恰も光明界に出でたる如く、無限の喜悅は湧き起らん。こゝに達せざれば、黑暗々裏に彷徨して、何れに歩まば明るみに到るべきかを知らず、運命の然らしむるところか、はた自己の力の足らざるが故かと、空しく煩悶して、歳月を費し終るなり。かゝるたぐひは、少しく學問したる人々にありて、無學者は却つて平々に世を送ることを得る

なり、然れども無學者の平々なるは、眞の安心ありて然るにあらざれば、これをこれ醉生夢死の徒と云ふ。此等は論ずるに足らざれども、修養中途にして未だ大悟せざる人は、例へば長き隧道に差しかゝりたる旅人の如く、退くに退かれず、出るに出られず、誠に困難なり、困難なれども努めて怠らざれば、遂には必ず、晴々たる光明界に到達することを得ん、故に人たる者眞理を究めてこれに徹底せんとせば、すべからず大勇猛心を以てし、如何なる困難にも屈撓すべからざるなり。

扱て大悟なるものに二あり、一を理論上とし、一を實行上とす。この二つ完成して、始めて些の不安なき境地に到ることを得るなり。

先づ理論上とは、所謂現象に對する吾人の心的作用を考ふるにあり、言ひ換ふれば吾人の心的作用より生ずる萬有を悟るにあり。而して齷齪たる差別を撤して、平等一體の境を感得するにあり。なほ進んでは萬

有すべし無なりと觀するにあり。かゝる境地に達すれば、吾人は善惡是非の外に超出して、心身恰も漠たる原野、虚たる空間に懸るが如けん。而して何等の自己を拘束するものなく、随意に翼を延ばして、東奔西走思ひの儘に到り、愛着憎惡自由ならざるなきが如し。唯心論の哲理にても味ふ時は、何人もかゝる境地に到ることを得るが故に、敢へて異とするに足らず。異とするには足らざれども、然れどもまた大いに注意せざるべからざることあり。何ぞや、千差萬別、複雑極まる現實界より、一躍直ちに眞空に到り、絶對自由に遊ぶことなれば、却つて驚き迷ひて方向を誤り、心身を亡ぼす者少なからざればなり。これ道を修むるもの、尤も危険なる時期なりとす。然り、利害得失、善惡正邪、生死轉變すべて無差別なりと觀するが故、身現實界にありて、而して人類たる面目を保たざるべからざるものなることを打ち忘れ、放逸無耻の言行を敢へてして、以て

眞理こゝにありとし(今日學問ある人にしてかゝる見解者多きを余は悲しむ)或は些の奮發なく、無意無能以て命なりとなすが如きは、何等貴賤等差なき理論界を以て、直ちに人生に適應せしめたるものにして、共に精神的自殺者と云ふべきなり。何となれば人類としての價值あり、光輝あるは、吾人が元來他物より優勝に造られあるが故にあらず、即ち自然に貴くなされたるにあらずして、吾人自ら自己を勵まして努力向上するところに存すればなり。されば吾人は天才なるが故に尊きにあらず、天才は自然の性質なればなり。自然に賢きは稱するに足らず、自然に愚かなるは咎むるに足らず、自然の儘にては殆んど無意味なり。従つて出生高位置なるが故に尊きにあらず、出生賤しきが故に貶すべきにあらず、すべて自己の意志力能に關係なき自然の儘にては何等の價值もあらざるなり。

例へば天才の者なりとも、これを以て人類の爲めにするの意志あるにあらざれば殆んど無價值なり、又出生高貴なるもそれ以上の向上なければ、何等の稱すべきなく、卑賤の出と雖も自己の力により幾分の向上を爲さば、其爲したる丈け高貴の出より尊きなり。故にしかゝの事を爲すは余の天命なるが故なりと云ふは非なり、宜しくしかゝの事を爲すは人類の爲めなり、故に必然天命にも叶はざるべからずと云はざるべからず。これ吾人の眞價值は、自己を自覺するによりて、始めて得らるべきものなればなり。

かくの如くして、理論上の徹底あり、又幸にして誤謬に陥らざるを得んも、これにて満足すべきにあらず、進んで實行界に入らざるべからず。然らば如何してこれを爲すべき、勿論一度びは差別界を徹去する必要はあれども、こは理論上のみの事、若しくは暫時の休憩所として靜かに

保存し置き、さて實際は、現社會に於て、眞面目に活動するにあり、即ち道徳的の人となるにあり。

理論上の徹底は實は實行界に入る階段なり、準備なり、吾人の眞面目は實行界に於けるものなるが、この事たる至難中の至難にて、終生勉勵するも猶ほ充分なりと云ふ能はず、理論上の徹底は一時のものなれども、これを實行界に持ち來して、充分満足すべき状態たらしめんには、實に終生に涉りて努力せざるべからざるなり。

第四節 吾人の進路

吾人は努力して進歩向上すべきもの故、安閑として成るが儘に任すは愚の至りなり。而もある論者は曰く、人は高きを望み多くを爲さんと思ふべからず、現在の位置を保存して、徐々にそれを改良し行かば足らん

と、吾人も小學時代に於て屢々かゝる言を聞きたり。例へば一生徒あり、父祖の職業を繼續するのみにて満足する能はず、それ以上の目的を立て、これを實行せんと希望する場合に、これを戒めて曰く、汝家業を捨て、他に從事せんとするは、畢竟功名心の奴隸となりたるが爲めならん、而も功名は他事に轉ずることを以て得らるべきにあらず、如何なる業にても誠心これを力めば其功績は同一なるなりと。これ或は眞ならん。然れども人未だ完全の境に達せず、社會未だ圓滿の域に到らざるが故に、人に賢愚の別あり、又職に千差萬別あり。これを以て、現在の境遇如何に拘はらず、進んで自己の適するところに赴かんことは、人物經濟の上より見ても稱すべき所爲ならずや。然り、而して人は何時までも小學時代の小兒にはあらず、年齒歳々積れば心意も自ら發達せざるを得ず、然るに三ツ子の魂百までと云ふ譬の如く、成人尙且つ小兒の束縛を脱

する能はず、斷乎たる決心に出でかねて、一生を煩悶し去る人多きこそ悲しむべきの極みなれ。

平等一如の圓滿なる社會は、吾人の熱望して忘るゝ能はざるところなれども、かくの如きは容易に實現さるべくもあらず。されば吾人は遺憾ながらも幾分の差別を設けて、事業の大小により、感化の厚薄により、人物の價値を定め、上下を分たざるべからず。然れば吾人は下ならんよりは、上ならんことを望むは當然なれば、其下なる境遇を離れて奮進すべきは、吾人の將になさざるべからざる職責ならずや。

これを心理的に解剖すれば、二の異なる方面あり一は即ち現在の境遇に安んじて、敢へて、それ以上の向上を望まざるもの、若し其奮勵を促せば余の境遇これを許さざるなりとの言を以てす。これを消極的方面と云ふ。これに反し、現在の境遇如何にかゝはらず、自ら進んで機會を求め、

自己の好むところに向つて努力向上して、毫も悔ゆることなきを積極的方面と云ふ、この二のもの、各人皆具備す。かくの如くなれば、人若し自己の消極的方面にのみ止まり、他の積極的方面の開拓を爲さざれば、其事業の成否如何にかゝはらず、自己中にては既に敗北したるなり。これを寶の持ち腐れとも云ふ。されば世の小成に安んじたる輩は、自ら得たるが如しと雖も、これ強いて得々たるを装ふ者にして、實は心中大いに不足不満を感せずんばあらず。これに反し、たとへ事業の完結を告げざるも、積極的方針にて進みし者ならば、少しの心残りもなく、泰然世を辭することを得るが故に、これを眞の成功者と云ふべきなり。

されば大成功とは、ある事の完結し、決定したることにはあらず、例へば學校を卒業したりとか、官位に就きたりとか、或は月給を取るとか、其大小高下に係はらず、かくの如きことを云ふにはあらず、其位置境遇の

如何を問はず、不斷の努力不斷の向上を怠らざる有様を云ふなり。若し人小成に安んずるとも、社會より見る時は、最下等人にはあらざらん、而も自己に顧みる時は、積極的に進まざりしことを必ず後悔するならん、故に心中に於ては、小成に安んじたるを、敗北に終りたりと云ふなり。かくの如くなれば、人生の眞價値は、單に上流に位するにあらずして、そが奮闘の量にあり、そが行動の範圍にあり、そが目的の至善にあり、そが感化の有益なるにありて存す

吾人は大成功者たる第一準備として、先づ心邊の束縛を脱せざるべからず、多年の苦學修養も畢竟はこれが爲めなり、心邊の束縛を斷つて外事外物に使役せられざるが爲めなり、因果あり、應報あり、時間あり、空間あり、絶對相對可知あり、不可知あり、科學哲學宗教各々これを云ふ而も吾人は他觀してこれを認むるのみ、自觀は獨立自尊の境界なり、毀譽

褒貶の煩ひなく、利害得失の繫縛なく、仰天俯地些の自己を苦惱せしむるものなき境界を得るは、實に大成功者たる最大要件なり、若し吾人にしてかくの如き境界を得ざるものとすれば、苦學何の効あらん、修養何の益あらん、たゞ人を苦しめ、世用を費すに止まらんのみ。

あゝ吾人は既に小兒にあらず、小兒の保護監督は不用なり、さらば進んで自己の進路に向はざるべからず、而して獨立不撓の精神を以て、自己の至善と考ふるところを爲さざるべからず、これ眞の安心法なり、眞の快樂なり、而して又道德宗教の極致なり。

第五節 結

如何なる書にても、多少の感化力なきはなけれど、哲學、殊に唯心論、懷疑論等始めて味ふ時は、思はずそれに釣り込まれて、精神少しく朦朧

となる事あり、尤もこの事たる書物に於てのみならず、哲學上の問題に就てのみならず、すべてあまり熱心に事物を考察するか或は社會に不満を抱く等の事ある時は、理論と現實と混亂するが如くなることあるなり。かゝる状態の甚だしきものを狂者と云ふなるが、血氣旺盛なる時は、何事にも感動し易ければ、勉學も程加減にして、無暗に凝り固まらぬ様注意せざるべからず、殊に天才の人に於て然り。

抑も現社會は、人の思惟し囑望する如き文明進歩の境界に到達せるにあらず、未だ天才有爲の人物を容るゝ宏量なき故、この種の人物は多く困難し、煩悶するを常とす、これ甚だ悲しむべき次第なるが、社會の程度未だ自己に適せざる故なりと思ひて、心靜かに時機の到るを待つべし、然らずして事を性急になさんとすれば、却つて心身を傷ふに至るなり。

社會の状態をして、しかく偏狹ならしむる原因は多々ありと雖も、中にて最大原因と認めらるゝは嫉妬心なり、各自自己の名聲を高めんと欲するが故に、他を嫉妬するは自然の數なるが、こはまた實に想像以上にて、現社會は全く嫉妬を以て充たされつゝあるが如し、金錢に就て、力量に就て、容貌に就て、殊に甚だし、獨立自尊の人は自己の力に信頼するが故、嫉妬心少しと雖も、普通平々の人は、自己の奮發勉勵を力めずして、たゞ他を陥れんとのみ計るなり。かゝるところへ書物上の外何等の知識なき無垢の人來らば如何、忽ち周圍の陥穽にかゝりて、而も自己は其然る所以をしらず、自己の力の足らざるが故なりと思ひて、遂には神經を衰弱せしむ。

嫉妬の外、世には猶ほ闊なるものありて、其系統以外のものゝ入るを拒む、如何に才能あり、力量ある人物なりとも、これを疎外すること、恰も

藤氏にあらざれば人間ならずと云ひし昔に異らず却つて何とかしてこれを苦めんとす。

かくの如き現社會の有様なれば、事々物々不結果に終るとも決して自ら落膽すべからず、而して如何に不幸に遭遇するも自己の赤心を顧みて喜んで益々奮勵し、努力して最後の勝利者たらんを期せざるべからざるなり。

世間の多くを見るに、不正者勝利を得て、正者却つて敗北するが如し。これ何故ぞと考ふるに、正者とは正しき者なり、正しき者とは道に叶ひたるものなり、然り道に叶ひたるものなるが故に、道の外に心なし。かゝる明々白々の心なれば、不正者は道を知りて、直ちに正者の心中に附け込むことを得るなり。これ正者の多く敗北する所以なりとす。而も不正者何ぞ永遠に榮ゆることを得ん、遂には其魂膽の暴露する期あるべき

なり。

不正者の到底長く榮ゆる能はざるは明かなれども、たとへ一時にても榮えざらしめん爲め、吾人は自己の心中に附け込まれざる様注意せざるべからず。かくして本書を通じて述べたる如く、天地萬有の大體を覺り、人生の錯雜を究め、些の不安なく、些の疑惑なく、胸宇の廓大なる宇宙を容れて猶餘りあり、生死に動かす、愛着に煩はされず、貧困に苦しまず、頂天立地、自己の進路に奮進することを得るもの、これを大人物と云ふ、大人物とは學問技藝の優れたるを云ふにあらず、舉措容姿の秀麗なるを云ふにあらず、能辨達舌を云ふにあらず、身體頑強なるを云ふにあらず、否これらはすべて大人物たる資格に光輝を添ふるものなれども、これのみにてはたゞ外面の裝飾たるに過ぎず、大人物の眞骨頭はこれら紛々たる外面の裝飾にあらずして、其内心の自由であり、其自由の表

現にあり、些の痴疑なく自己を表現し得るものは、實に大人物なり。

既に自己の表現なり、表現とは表に現はるゝことなれば、椽の下の方持ちたることにはあらず、而も椽の下の方持ちたるを好む者あらば、或はそれも可ならん、されど名譽心また大いに可なり、然り名譽心なければ吾人は到底奮發する能はざるなり、世界に歴史の存する限りは、吾人は天下に名を成して大いに名聲を求めざるべからず、而して後世に傳へしめざるべからざるなり、名聲を求むるは決して卑劣にあらず、世界に歴史の存するなくば止む、苟も何等かの後世に傳ふるものある限りは、吾人は到底椽の下の方持ち然として、それにて満足する能はざるなり。

人生の問題は多々あり、而も結局は男女間の問題なり、而して兩者の位置の同等に近き程、世は發達したるなり、位置の同等とは職業の同一

と云ふ意味にあらず、男女各自の職責を保持して、而も社會に於ける位置を同等に見ることを云ふなり、男女の關係を見れば、國の盛衰を知るを得ん、故に余は斷言せんとす、女子を翫弄視する國は亡び、專制政治の國は亡び、道德宗教なき國は亡ぶと。

萬有可解人事可悟

終

正誤

兀 元 (21 七行六字目)

欠缺 缺陷 (69 一行二十九字目及三十字目)

欠缺 缺陷 (69 七行六字目及七字目)

欠缺 缺陷 (70 九行八字目及九字目)

明治四拾年六月七日印刷
明治四拾年六月拾日發行

萬有可解人事可悟

著者 山崎兼子

發行者 大葉久吉

發行者 岡平助

印刷者 三島宇一郎

不許複製
定價金參拾錢

發兌

東京市日本橋區本石町三丁目
大坂市東區備後町四丁目

寶文館

東京市神田區表神保町二番地弘文堂印刷所

寶文館發兌書

文學士 朝永三十郎著	● 增訂 哲學綱要	全一册製	定價金壹圓貳拾錢
文學士 吉田靜致著	● 倫理學要義	全一册製	定價金壹圓八拾錢
文學士 守月 晃著	● 倫理通論	全一册製	定價金九拾錢
文學博士 福來友吉著	● 心理學講義	全一册製	定價金貳圓五拾錢
伊賀 駒吉耶著	● 心理學原論	全三册製	定價金七圓
伊賀 駒吉耶著	● 心理學要義	全一册製	定價金拾貳圓
文學博士 芳賀矢一閱 石橋臥波著	● 夢	全一册製	定價金八拾錢
伊賀 駒吉耶著	● 感情教育論	全一册製	定價金壹圓八拾錢
法學士 藤井字平著	● 通俗人生及經濟	全一册製	定價金六拾錢
文學士 島文次耶著	● 英國戲曲畧史	全一册製	定價金壹圓五拾錢
文學士 內海月杖作	● われから	全一册製	定價金六拾五錢

寶文館發兌書

服部 躬治著	● 新樣 青年書翰文	全一册製	定價金四十五錢
服部 躬治著	● 新樣 女子書翰文	全一册製	定價金四十五錢
文學博士 星野恒校閱 青木武助著	● 參考 日本大歷史	全一册製	定價金十二圓
文學士 高桑駒吉著	● 東洋大歷史	全三册製	上卷金一圓二十錢 送料金十二錢
文學士 高桑駒吉著	● 東洋歷史講話	全一册製	定價金十二圓
理學博士 齋田功太郎共著 佐藤禮介共著	● 參考 植物學講義	全一册製	定價金十二圓
理學士 志田順共著 大島鎮治共著	● 參考 實驗物理學	全一册製	定價金一圓六十錢 送料金十六錢
法學博士 織田 萬著	● 法學通論	全一册製	定價金一圓七十五錢 送料金十六錢
法學博士 福田德三原著 坂西由藏譯	● 日本經濟史論	全一册製	定價金一圓五十二錢 送料金十二錢
文學士 村井堅固著	● 西洋歷史講話	全一册製	近刊
愛山山路彌吉著	● 日本現代史	全一册製	近刊

實文館發兌書

文學士 朝永三十郎著	●訂增	哲學辭典	全一册製	定價金貳圓三十錢
文學士 內海弘藏著	●	讀書作文辭典	全一册製	定價金壹圓五拾錢
文學博士 三島中洲監修 池田蘆洲輯著	●	故事熟語辭典	全一册製	定價金壹圓五拾錢
歷史及地理講習會編	●	日本歷史辭典	全一册製	定價金貳圓
文學士 坂本健一著	●	社會文學辭典	全一册製	定價金壹圓五拾錢
文學士 坂本健一著	●訂增	外國人名辭典	全一册製	定價金壹圓貳拾錢
法學士 田邊慶彌著	●	法律經濟辭典	全一册製	定價金壹圓
實文館編輯所編纂	●	小學各科教材大辭典	全一册製	定價金貳圓八十錢
實文館編輯所編纂	●最新	商業辭典	全一册製	定價金拾六錢
文學士 內海弘藏著	●	中等國文辭典	全一册製	近刊
文學士 內海弘藏著	●	中等漢文辭典	全一册製	近刊

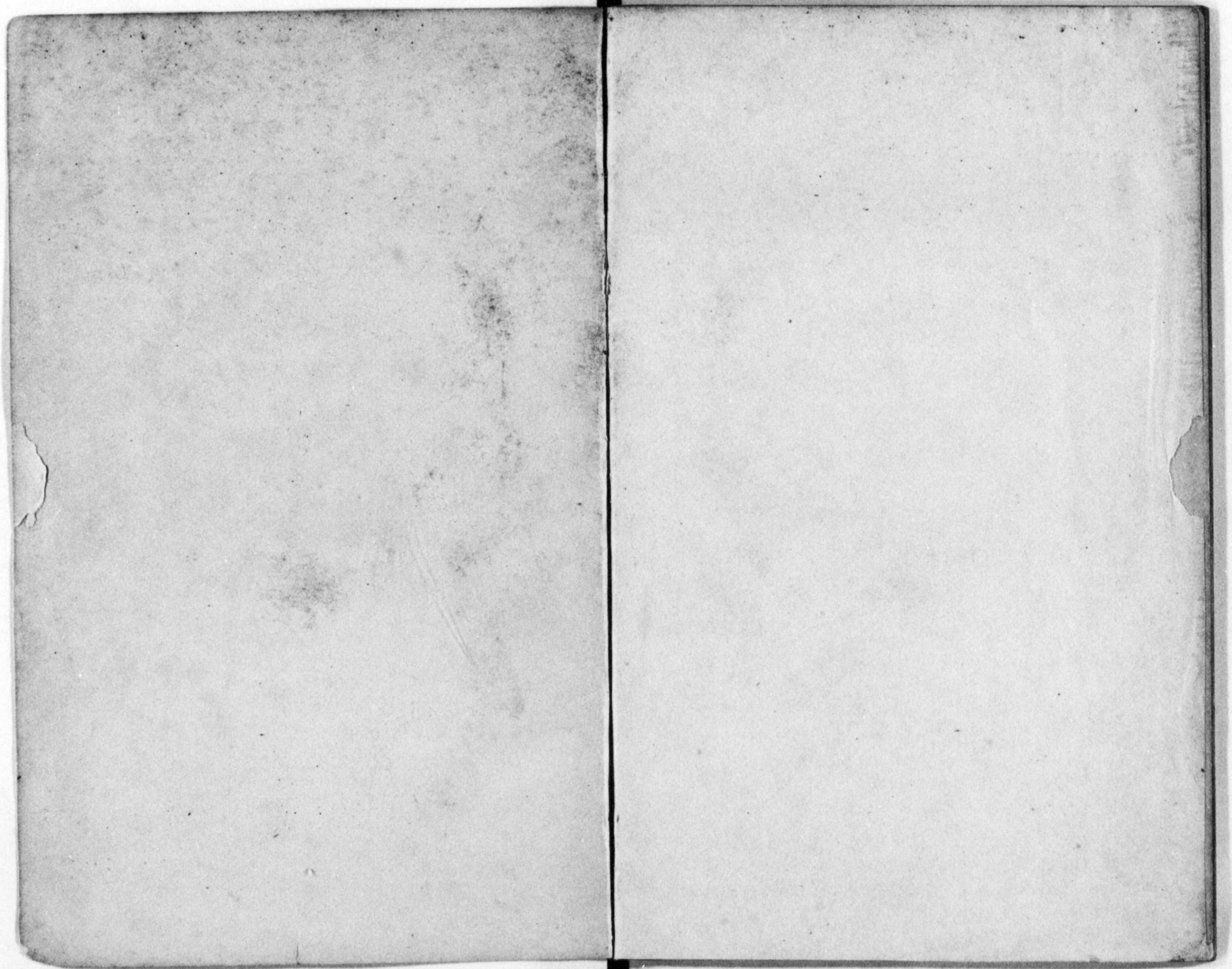
實文館發兌書

水哉竹內松治著	●	新漢文捷徑	全一册製	定價金六拾錢
水哉竹內松治著	●	新漢文捷徑初步	全一册製	定價金四拾錢
法學博士 和田恒謙三贊助 中學英語研究會編	●最新	英語獨修初步	全二册製	定價金六拾錢
法學博士 和田恒謙三贊助 中學英語研究會編	●	新英語獨修書	全二册製	定價金壹圓
法學博士 和田恒謙三贊助 中學英語研究會編	●	新高等英語獨修書	全二册製	近刊
山本庫太郎編	●	諸官立學校入學受験準備書	全一册製	定價金六拾錢
都築宗治著	●	談煙一抹	全一册製	定價金貳拾五錢
野崎茂太郎著	●	三餘漫筆	全一册製	定價金貳拾五錢
磯野秋清著	●	文のゆき	全一册製	定價金參拾五錢
櫻府隱士著	●	米在成功の日本人	全一册製	定價金三拾五錢
梅原龍北著	●	雲煙過眼	全一册製	近刊

31
353

寶文館發兌書

醫學博士 山本五郎著	醫學博士 長與稱吉閣	醫學博士 山本五郎著	醫學博士 長與稱吉閣	醫學博士 岡崎桂一郎編	醫學博士 原田豐遺稿	醫學博士 桂田富士郎監修 鈴木昌平著	鈴木昌平著	醫學士 山縣正雄閣 光藤介著	竹島茂郎著	野原利作著	萬福直清著	堀越千代子著	錦織竹香著
●通俗	●通俗	●通俗	●通俗	●通俗	●通俗	●通俗	●通俗	●通俗	●摸範教育	●家庭學校	●修身教材叢書	●和洋裁縫教本	●最新裁縫教科書
胃腸病養生法第一編	胃腸病養生法第二編	肺の養生法及強壯法	消化器病養生法	脚氣病養生法	眼の養生法	我家的新家庭	禮儀作法の栞	婦女訓話 第一編	和洋裁縫教本	和洋裁縫教本	和洋裁縫教本	和洋裁縫教本	最新裁縫教科書
洋裝全一冊	洋裝全一冊	洋裝全一冊	洋裝全一冊	洋裝全一冊	洋裝全一冊	洋裝全一冊	洋裝全一冊	洋裝全一冊	和裝全一冊	和裝全一冊	和裝全一冊	和裝全一冊	和裝全二冊
定價金五拾五錢 郵税金六錢	定價金六拾錢	定價金四拾五錢 郵税金全六錢	定價金四拾五錢 郵税金六錢	定價金四拾五錢 郵税金六錢	定價金參拾五錢 郵税金四錢	定價金八拾錢 郵税金八錢	定價金八拾錢 郵税金八錢	定價金六拾錢 郵税金八錢	定價金六拾錢 郵税金八錢	定價金六拾錢 郵税金八錢	定價金六拾錢 郵税金八錢	定價金五拾錢 郵税金各金六錢	近刊



W. G. ...



66

31
353